

—☒怒り☒を継ぐ者—

サクランボーイ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

彼女ほど怒りに取り憑かれ、怒りを恐れた者はいない。

彼女ほど怒りを受け入れ、怒りを欲した者はいない。

彼女は何より“怒り”を愛していた。

これはある少女が怒りに導かれ、かけがえのないものを得る物語。

ある者は言った。アレこそが人間の本能<sup>武器</sup>。

ある者は、恐ろしくて近づきたくもないと言った。

そしてある者達はこう言った——彼女は大切な家族だ。

彼女は——“怒<sup>いかり</sup>の滅竜魔導士”と。

前からやってみたかったFAIRY TAIL オリ主ぶっこみ創作です。

基本原作沿い、たまに微改変？ もありますがよろしく願います。

あくまで二次創作なので詳しく話を理解したい方はアニメか原作を見るのをオススメします。細かく書いていたら話が進みそうにないので（たんに作者の実力不——

それとオリジナルキャラは主人公と竜の二キャラのみです。エクシードは今のところ出す予定はないです（これも作者の——

初めての二次創作故、至らぬ所やゴリ押し部分もたくさんあると思いますが、そこを含めて楽しんで貰えると嬉しいです。

主人公の立ち絵になります。

イメージを崩したくない方は閲覧注意です。

# 目次

追想のラース	1
お泊まり会	15
解き放たれる怒り	30
人質	51
ルーシイ	66
新たなる火種	85
想いを喰らって	104
竜の目覚め	120

## 追想のラース

「つえりやああアアッ！」

「うおおおおオオ!!」

森に鈍く響き渡る、岩同士を激しく打ち鳴らしたような音。

一つ二つと数を重ね、やがてマシンガンの如く猛烈な激音に至る。

お互い手加減なしの全力、打ち所が悪ければ大怪我もあり得るまでの威力が含まれた二人の拳が一層強く衝突すると、双方弾かれたように後方へ弾き飛ばされた。

「おい！ リイリスッ！ もつと本気<sup>マジ</sup>でかかってこいよ！」

「だつたらアタシをその気にさせてみなよ、つと！」

「うおつと——へっ、言われなくても、やってやるよ!!」 火竜<sup>かりゆう</sup>の——」

少女、リイリスの側転して勢いが乗った飛び蹴りを難なく交わした、桜色の髪をした少年が拳に炎を滾らせリイリスへと駆けて行き、そして——

「鉄拳<sup>てっけん</sup>ッ!!」

竜をも滅する事のできる炎を纏った一撃。

炎の滅竜魔導士であるナツ・ドラグニルは、およそ少女に向かつて放つべきではない

一撃を容赦なく撃ち込んだ。しかし撃ち込んだ本人だからこそ確信していた。

彼女にこれは当たらない、と。

そしてそれはすぐさま現実となる。

さっきの蹴りを放った体勢によって後ろ向きになっているにも関わらず、リイリスは炎の範囲も含めて紙一重の所で躲したのだ。そして回避するのに勢いよく捻った上半身のバネを使い、ナツのがら空きとなった胴へ掌底。

しかし、寸でのところで少年が片足を軸に背中から回転、回避してそのまま後ろ回し蹴りをリイリスの上半身へ直撃させた。

数メートルもの距離を砂と地面が擦れ合う音が彼女の靴底を振動させる。それによつて再び距離が空いた事で膠着状態となる。

勝負有り。

「くっ、く、悔しいいいっ!!」

片腕でガードしていたリイリスは心底悔しいと顔をくしやりと歪めて地団駄を踏む。

「なっはっはっはっ!! どうだ、これで俺の勝ち星が増えたぞー!」

からからと笑うナツに頬を頬を小刻みに上下させ苛立ちを表すリイリスだったが、すぐにそれがどうしたと言わんばかりに挑発をした。

「つぶ、別に悔しくなんかないし？　アタシがちよつと本気出せば絶対負けないし」

「だったら本気だせばいいだろ？」

「分かってないなあ。いざって時に本気出した方がかつこいいんだよ」

本気で言っているのかどうか分かりづらい返しに、ナツは心底理解できないのだから、至極もつともな事を言い返す。

「分かんねーよ。自分の本気に慣れとかねーと、そのいざって時に全力出しきれねーじゃん」

「ぐ……ナツのくせに正論言うな」

「くせについてどういう事だコラアア!？」

さつきとは別の殴り合いを始める二人。そこに洗練された動きは無く、ただ子供の喧嘩みたいにボコスカ殴り会うという光景が作り出されていた。

「あの二人、いつもあんなことして疲れないのかしら？」

「あい、本人たちにとつて習慣みたいなものですから」

体を強張らせ、呆れだか驚きだかが入り混じった微妙な表情をする金髪巨乳の美少女に対して、ナツの相棒である空飛ぶ喋る猫のハッピーは、もはや見慣れたとばかりに事務的に答える。

二人の殴り合い、もとい特訓の一部始終を見ていたこの少女は、魔導士ギルド――

フェアリーテイル  
妖精の尻尾所属のルーシー・ハートフィリア。ナツにリイリスにハッピーもこのギルドのメンバーにあたる。

今の特訓を見てから彼女の胸中を占めていたのは『まるで互いの動きを熟知しているようではないか』というものだった。

それもそのはず、ナツとリイリスは長年組手をしてきた仲なのだ。

ちなみに二人の間にあるルールとして、まず手加減をしない。

時と場合により多少条件が変わる事もあるが、基本的にこれが絶対条件となっている。

次に一度でも攻撃が相手にヒットすれば、その時点で勝負ありとなる。付け足すなら、ガード等をして防御したとしても有効打として扱われる。

ただし、全て打撃系で攻撃すること。当然、魔法も打撃系のみしか使つてはいけない。さらに、これに負けた方は相手の言うことを聞かなければならないという破茶滅茶なルールがあるため、自分が負けぬようにと必死でトレーニングに打ち込むのだ。その為、二人の格闘技術は目を見張るものとなっていた。

「んじゃ、今度いっしょにクエスト行くぞー！」

「へ？ クエスト？」

じゃれあいもそこそこに、さっそく勝利者の権利を使うナツに素っ頓狂な声を漏らし



て復唱するリイリス。いきなりの提案に理解が追いついていないようだ。

「最近一緒に行く事なかっただろ？ 久しぶりにチーム組もうぜ」

「……ふっ、あつははっ！ そんなのいつでも言ってくれば付いてくの。やっぱナツはナツだよなあ」

そう言つて気持ちの良い笑顔を咲かせるリイリスは丸太の上に座るルーシイへとご機嫌な様子で近づき、その豊満な胸に視線を向け元氣よく声をかけた。

「という事で次のクエストよろしく！ デカパイちゃん！」

「いやだから私ルーシイ!! それと胸に語りかけるな！」

クワツと目を見開きビシリ！ とリイリスにツツコミを見舞うルーシイ。

思えば出会いからしてリイリスはフランクに接してくる少女だったなど、ルーシイは彼女との出会いを昨日の事のように思い出す。

あれはそう、妖精の尻尾フェアリーテイルのギルドが幽鬼ファンタムの支配者ロードによつて襲撃された時のこと――



「マスター!! 今がどんな事態かわかっているんですか!!」

「そうだぞじっちゃん!! ギルドが壊されたんだぞ!!」

妖精の尻尾地下一階にて、無断で向かったS級クエストから帰ったナツ・ドラグニルとハッピーにルーシー。そして彼らを連れ戻すために同行していた氷の造形魔導士のグレイ・フルバスターに妖精女王の名を冠するエルザ・スカーレット。

彼らは重い罰を受けるはずがマスターからのチョップだけという軽いものに済んだことが些事に思えるくらい、ギルドを壊されたという現実に堪えきれない憤りを感じていた。中でもナツとエルザはギルドマスターであるマカロフに掴みかかる勢いすらあった。

「まあまあ、おちつきなさいよ。こんなこと、騒ぐことでもなかるうに」

しかし意外というべきかギルドの長たるマカロフ・ドレーアの声に怒りは感じられず、それどころか気にした風もなく二人を鎮めるのに発した言葉は、しかし頭に血が登った彼らには逆効果でしかない。

なぜ怒りを覚えないのかと、ナツがさらに詰め寄ろうとした時——場の空気が変わった。

「随分と思いきった衣替えをしたじゃん。まあ、鉄棒あんなのいっぱい生やすなんてさすがに興味が悪いと思うけど」

それはこの場にいる全員の心に火をつけるには十分な物言いだった。だというのに、

誰一人として突っかかろうとはしない。決して静かとは言えないギルドの地下は、不意に上から届いた少女の声によって嘘のように静まり返ったのだ。

まるで見られてはいけない所を見られたというような雰囲気が漂う。

まさか、もう帰ってきたのか？

なんてタイミングで……。

こりや終わつたな。

怒りの日の再来だ……ッ。

耳を傾けていなければ聞き取れないほど小さく、それでいて不吉な声が周りから上がる。

一体どうしたのだろうか、さきほど聞こえてきた声の主に対してルーシィは不安と好奇心を感じていた。

そんな中、階段から降りてくる人物の足音だけがいやにはつきりと轟いていた。

「——っ、おまえは！」

「む、ちやうど帰つたか——リイリス」

リイリスと呼ばれた人物、それは十代半ばより幼く見える少女だった。

色素の抜けた紫色の髪は短めだが両サイドから一房ずつ跳ねている。

服装は袖なしの黒いジャケットの下に暗い赤のトップブラ、短パンにロングブーツ、

腕を覆った黒のアームカバー上部分にはふさふさした毛並みのいいものが使われている。

一見露出度が高く、その格好に目が行くところだが、何よりルーシイの目についての  
は——

「それで、依頼の方はどうじゃった」

「そりやもうバツチシ。あ、でもさ聞いてよー。帰り道にちよつと雨に降られてさあ」  
笑顔だった。

マカロフの元へ行くや否や世間話を始めた少女は外の惨状をまったく気にしていなかった。

おそらく話の内容からして彼女もギルドの一員なのだろう。しかし、ならばなぜあんな混じり気のない笑顔を浮かべているのだろう。

マカロフと少女だけ場違いとも言える雰囲気の中、やはりと言うべきかナツが異論を唱えた。

「リイリス!! なんでお前まで怒らねーんだ!! いつもだったら——」

少女に向けて、お前だけはと絶るようなナツの言葉は他ならぬその少女、リイリスによつて遮られることになる。

「ナツ、またそこらじゅうで騒ぎ起こしてたみたいじゃんか。ダメだつて少しは抑え

るってことを覚えなきゃ」

「は、はあッ!？」

「おいおい……まじかよ」

「あのリイリスがこんな状況でナツに説教だと……!？」

「嘘……」

ナツの気迫もどく吹く風といった態度にナツ本人のみならず、グレイやエルザ、マカロフの隣にいるミラ・ジェーンすら驚きを隠せずしていた。

それぞれの反応にこれといった言及もせず、ポケットから取り出した上下が白と黒に別れたマジックを回しながらリイリスが言葉を続ける。

「別に誰かが傷つけられたんじゃないみたいだし？ あれなら建て直せばいいじゃん。それに——」

二度目は与えるつもりもないし。

ほんの一瞬、これまでで一番の怒気が噴出した。それも一人の少女から。

同じギルドメンバーからしてみても、それは冷や汗が吹き出すレベルのものだった。

その中で多くの者の目がある一点に釘付けとなっていた。

視線の先には、上から移動しておいた依頼板クエストボードのど真ん中に、煙を出しながら半分近く

埋まったマジックペン。

言うまでもなくリイリスによって成されたことだ。

「その通り。だいたい不意打ちしかできないような奴等にめくじら立てる必要はねえ。放っておけ」

「それでも納得なんてできねえよ!!」

「この話は終わりじゃ。ナツはその持て余してる力でも使って仕事に……やっぱ今のなし。ワシの仕事が増える」

半分冗談の交じった軽口を残したマカロフはそのまま逃げるようにその場を後にした——『トイレトイレ』と言いながら。

どうしてそんな冷静でいられるんだ。そんなやり場のない憤りを拳で握りしめて抑えるナツにあやすようにミラが事情を説明し始める。

「ナツ、みんな悔しい気持ちでいっぱいなのよ。でもギルド間での武力抗争は評議会で禁止されてるの」

「さきに手を出したのはあっちじゃねーか!!」

「……しかしこれ以上、妖精の尻尾が目をつけられるのは好ましくないというのも事実。悔しいが下手に動かない事こそ現状一番とマスターは判断されたのだろう」

誰も口を開けなくなり、辺りに沈黙が流れる。

エルザの的を射る提案を受け入れるしかない、みんなどこかで分かっているのだ。

ただでさえ問題の絶えないギルドとして名を知られているというのに、それに加えて禁止されているギルド同士の争いを起こしたのなら、最悪解散という事になりかねない。

そんな想像もしたくない未来を予感したせいか、重苦しい空気が場を包む。

「と、ところでよりイリス」

そんな中、グレイが遠慮しがちにリイリスへ声をかけた。だが彼の様子からして話の話題を変えるというより、爆発寸前の爆弾を扱うような慎重さが見てとれた。

「気になったんだが、お前ってナツみてーにもっと感情を吐き出してなかったか？」

「確かに今のリイリスって変だよ。何かあったの？」

グレイが投げかけた疑問に便乗してハツピーも自身が感じた事をリイリスに問いかける。

その答えに多くが固唾を飲んで待つこと数秒ほどだろうか、ナツやエルザすら黙っている中、彼女の口がついに開かれた。

「それよりもアタシが気になってんのは……」

「へ？」

残像を残すスピードでルーシイの背後に周り、そして。

「デ〜カパ〜イちゃん！」

「わきやあぁあッ!？」

大きく主張する二つの果実に指を沈ませ揉み回しはじめた。

『『おおおおお〜!!』』

周りの男共が歓声を上げる中、エルザやミラは額を抑えたり引き攣った笑みを浮かべる一方、レヴィは恥ずかしそうに見ながらも目を離せないようだ。

「アンタだよアンタ。なあなあ、アンタ新人さんだろ?」

「ちよ、ちよつとお!!」 揉みながら聞くの止めてくれる!？」

「じゃ、揉むのに集中する」

「いやそうじゃなくて、ってイヤアアー!!」

柔軟に形を変えるたわわな胸に心奪われる男性陣。そこにはグレイも含まれており、リリスのセクハラを受けるルーシィのちよっぴりエロい光景に顔を赤くしながら目を逸らさずにいた。ナツは不機嫌なまま興味無さげだ。

そしていつの間にか『いいぞー! もつとやれー!!』とトイレから帰ってきていたエロジジイが声援を送っている。それでいいのかマスターよ。

やいのやいのいつもの妖精の尻尾のように喧騒に包まれた地下からは活気が満ち溢れていた。



「ごめんごめん。あんまりにも見事なおっぱいだったからつい」  
手を合わせて謝罪するリイリスの前には、座り込み疲れ果てた様子のルーシイがいた。

「しよ、初対面であんな遠慮なしに胸を揉む……？普通」

「だから謝ってるじゃん？ きちんとお詫びとかするからさ」

「いや、物で釣られるみたいでそういうのは……」

「お金の方が良いとか？」

「お金!? ——んっ、んん！ べ、別に気にしてないからいいわよ」

「わー、わっかりやすー……」

つい自身の本音が出かけた事に、金の力は強しと可哀想な目で見つめるリイリスにルーシイは気まずそうに本来の話題に移る事にした。

「自己紹介がまだだったわね。あたしルーシイ。少し前に妖精の尻尾に入ったばかりなの。そして星霊魔導士よ！ これからよろしくね」

ルーシイは意識を切り替えて手の甲にある紋章を誇らしげに見せる。まるで子供が宝物を見せる時のような純粹でかわいらしい笑顔を浮かべて。

そんな彼女に笑顔でリイリスも応えようとする。

「アタシは——」

「おいリイリス。いつものやるぞ」

しかしそれは、未だに怒りの収まらないナツによって阻まれたことで黙り込むこととなつてしまふ。

彼女をそうさせたのは、有無を言わさぬナツの迫力によるものか、それとも別の理由か。無言でナツを見つめるリイリスは、ルーシイとの会話を邪魔された事に特に不満も表さず、むしろ待つてましたと言いたげに軽く体を動かし始める。

「……いいね。アタシもちよつと溜まつてたところなんだ」

「え、え？　な……何しに行くの？」

「ごめんデカパイちゃん、自己紹介はまた今度。ちよつと外行つてくるから」

言外についてくるなど言い残し、そのままナツと二人で階段を登つていくリイリスになんとも言えない雰囲気を感じつつも、次の機会となつた彼女の自己紹介を残念に思いながらルーシイはそのまま見送つた。

「つて、誰がデカパイ!!？」

## お泊まり会

「おかー」

「おかえり」

「いい部屋だな」

「よオ」

「いらっしやーい」

「ちよつとなんでこんな人多いのよお!？」

あの後、ギルドの補強の手伝いに追われている内に、夜になってしまったなど星空を見上げて早く帰って疲れを取ろうと急いでいたルーシイだったが、帰宅して早々に天井を突き抜けるような声で嘆いていた。

当然と言えば当然。

なにせ帰宅して最初に目にしたのは自分の部屋を占領する一匹と四人だったのだから。

「ファントムの件だが奴等がこの街まで来たということは、我々の住所も調べられてい

る可能性がある」

「ええええっ!?!」

「でことで、しばらくみんなでいた方が安全だつてミラちゃんがな」

「今日はみんなあちこちでお泊まり会やつてるよ」

エルザとグレイの説明を受け、成る程と一応の理解をしたルーシイに、部屋を歩き回るハッピーが付け加える。そのハッピーのお泊まり会というワードに反応したリイリスが心底楽しそうな声をして、みんなから背を向けているナツに語りかける。

「いやー、お泊まり会なんて心踊るなあ。ほらほらナツも拗ねてないで、楽しそうにすればいいじゃん。そんな変な髭外してさ」

「拗ねて無えー!?! つか、コレもコレもお前に負けたから着けさせられてるんじゃないか!!」

「——っ、あつはっはっはッ!!」

勢いよく振り向いたナツの鼻には付け鼻が胡座をかいていた——ネコの髭付きで。さらにおまけとしてメガネの奥でつぶらな瞳をたずさえたアイマスクという組み合わせ。

それを見たリイリスとグレイにハッピーがたまらず笑い転げ、不意打ちでナツの変装を目にしたルーシイも小さく吹き出す。つられてエルザも顔を背けて笑いを堪えてい

た。

「テメーら全員ぶつ飛ばす!!」

「お、久しぶりに三つ巴いつてみる?」

「いいぜ、ナツだけじゃなくお前もどれだけ強くなったのか分かるしな!」

なにやら瞳に炎を燃やす三人のやる気は十分。

しかし家の中で暴れられてはたまったものではないだろう。だが、この中で唯一彼らを止めることのできるエルザはと言うと。

「仲良きことは良いことだ」

うんうんと満足そうに頷きなにとやら見当違いな思いみをしている模様。

「いやとめてよ!」

「あい! レディ、ファイトオー!」

「勝手に始めんな!!」

絶えずボケ続ける連中に『疲れを取るところか貯まる一方じゃなくい!』と、心の内で泣きながら叫ぶルーシイの悲鳴は誰にも聞かれることはないものであった。

それからなんとか騒ぎを治めることに成功したルーシイだったが、次なる騒ぎの火種はそこかしこにある。なにせここは自分の部屋。どれもこれも他人に見られたくないものばかり、例えば――。

「なにこれなにこれ。わ、エッチじゃん」

「ねえねえエルザ見て、エロい下着見つけたよ」

「す、すごいな……こんなのを着けるのか……」

「へー、これが噂の自作小説か」

「なんだよルーシイ、こんなにお菓子隠してんのか。オレも食うぞ」

リイリスの見つけた下着に群がるネコにエルザ。

机の上に置かれていた小説の原稿を手取るグレイ。

どこからか見つけ出したお菓子の入った箱をあさるナツ。

「ちよつとグレイそれ読んじゃダメー!! もう、あんた達人の家エンジョイしすぎよお

……」

まさに勝手知ったる他人の家である。遠慮という言葉をかなぐり捨てた暴挙にルー

シイもへとへとだ。

色々と見られてはいけないものを見られてしまった乙女が深く落ち込む傍らでどん

どん話を進める自由人共。

「それにしてもおまえたち汗臭いな……同じ部屋で寝るんだ風呂くらい入れ」

「やだよ、めんどくせー」

「オレは眠ねみーんだよ……」

「だったらみんなで入る？」

一番動き回っていた三人がバラバラな意見を言う。ここまで我が道を行く姿勢だと感心すらしてしまうレベルだ。

「ふむ、また昔みたいと一緒に入ってやってもいいが……」

「アンタらどんな関係よ!!」

まさかの爆弾発言にびっくり仰天である。

「そんなの仲間家族に決まってるだろ？　　なー、ハッピー」

「あいー」

リリスの腕の中でくつろぐハッピーは彼女が恥ずかしげもなく発した言葉に元氣よく同意した。

そういうものなのかと納得しかけてしまったルーシイだが、一般的に見て年頃の男女が一緒の風呂に入るのは色々とマズいだらう。

リリスはギリギリセーフだとしても——それがチラリと彼女の身体を盗み見ての感想である。

日頃の鍛練により引き締まった身体はまだ子供らしさが強く、それでも無くはない胸はしかし、スタイル抜群の女性が多い妖精の尻尾では無に等しい存在感だった。つまり、将来に期待だ。

「おいデカパイ。こいつなら今でも一緒に入ってそうだな、なんて思ったろ？」

「そ、そんなことないわヨク？ あ、そうそう！ あんたの自己紹介まだ聞いてなかったんだ！」

「んー？ そういえばそうだったっけ」

ルーシイから刹那に送られた視線に勘づいたリイリスは目を据わらせ低くした声で核心をついてきた。これはまずいと、あからさまに話を逸らすルーシイの狙いどおりそういうば自己紹介する予定だったと思いい出したリイリスは、疑いの眼差しを止め素直に従った。良く悪くもさっぱりした性格なのだろう。

「アタシはリイリス。妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士で肉体強化の魔法を使う。てことでよろしくルー——このツ、デカパイ!!」

「ねえ、なんで途中まで良かったのにまったく別の呼び方にしたの!? そんなにあたしの胸に恨みでもあんのー!？」

「うっさい！ そんなデカいだけのおっぱい動くのに邪魔だろ!! このツ、肩でもこつてろ！ アタシはこらないけど——っ、悪かったな!!」

無難な挨拶が終わろうかという所で、思い出したかのように怒りを再燃させる。しかも何故か自分の言った事にキレ始めボルテージを上げる始末。やはり根に持つタイプかもしれないと改めてリイリスへの見方を考え直すルーシイであった。



「別にいーじやねーか胸なんか無くたって。お前はお前だろ？」

「な、ナツう……ッ、んふふっ」

珍しくまともな事を言う仮装状態のナツに笑いながら感動の涙を滲ませるといふ器用なりアクションをするリイリスに、ホツと息を吐いてこれでなんとか落ち着いたかと安心しかけたのも束の間。

「つか、胸がデカいリイリスなんて想像できねーわ、なっはははッ!!」

プチリッ。

まさにそんな音が部屋に木霊した。

「アタシだつてなあ! 成長が遅くなけりや今頃バインバインのナイスボディだつての!! つか、なんで歳もそんな変わらないはずのエルザやミラ達に比べてアタシはこんななんだよ!!」

「えエ!? そうだったの!?!」

驚きの事実が発覚した。

てつきり見た目くらしいの年齢と思われたリイリスはなんとエルザ達と歳が近いらしい。なんでも自分だけ周りより成長スピードが遅いとか本人は言っているのだが、悲しいことに他人が聞けば苦し紛れに出した言い訳としか聞こえないだろう。

「すまない、リイリス……私はてつきりおまえはそういうことは気にしないものとか

り思っていた。知らぬ内に仲間を傷つけていた私を殴ってくれないか」

「分かった!! どこがいい!? 胸か? このおっぱいか!!」

「訳わかんねーこと言ってるぞ、落ち着けリイリス! お前も去年よりは成長しているぞツ……たぶん!!」

エルザの本気か冗談か判断できない申し出に我を忘れているリイリスが全力で乗っかるのを、必死の形相で止めるグレイはなんのフォローにもなっていない事を言う。ナツは殴り飛ばされて顔が内側にめり込み大の字でダウン。床を見れば無惨な姿となった仮装セットが哀愁を漂わせていた。

ギルドを壊されても大声一つ上げなかった彼女と今の、それこそ子供のように喚く彼女とのギャップにルーシイは混乱していた。というよりも今の振る舞いこそが本来のリイリスのものではと阿鼻叫喚の中、現実逃避を経て導き出した答えだった。

「あはは……あいつらってあんなに仲良かったんだ」

「あい。みんな昔からの付き合いです。特にナツとリイリスは頻繁にチームも組んでるんだよ」

もう勝手にやってくれ、と騒ぐ仲間達を遠目に独り言を溢すルーシイに魚を手を持ったハッピーが答えた内容に今度は戦慄する。

「ナツとリイリスでチームって……そこらじゅうを壊し回ってたなんてことないわよね

？」

最早、ルーシイの中でリーリスはナツと同レベルの問題児となっていた。当然と言えば当然。

「いや！ よつぽどの事がないとリイリスは暴れないし怒らんが、本当に怒ったときは誰にも手がつけられない！」

「まあ喧嘩っ早いさで言えばナツと同じようなもんだけどな!!」

「そ、そうみたいね」

そしてエルザとグレイの尽力あつてか、少しずつ狂暴さが引いていくリイリスはしばらく経った現在、エルザから『人の家で暴れすぎだ』と正座をさせられ説教を受けている。

テーブルに座るグレイとルーシイは疲労困憊といった様子を見せる一方、ハッピーは幸せそうに魚を頬張っている。

「まさかギルド壊されても怒らなかつたリイリスがあんな風になるなんて……」

あの時は周りの反応で彼女が危険な人物なのかと身構えたものだが、考えてみれば最初に接触された時から違う意味でヤバいという以外、ルーシイの考えるようなヤバい奴ではなかった。その考えもさっきの騒動で揺らいでいるのだが。

「ルーシイはまだ知らないんだよね？ リイリスはよつぽどのことがない限り怒ったり

しないんだ」

「そのよつぽどの事がファントムの件だったんだが、それでも平気って感じだったろ。だからみんな不思議がってたんだ」

「さっきのあれはよつぽどの事じゃなかったのね……」

あれほどの暴れようでも本気ではないのかと、信じられないといった目で説教中のリイリスに目を向ける。まだ終わりそうにないエルザの説教に、落ち込んだ様子で聞く姿はまるで見た目相の少女としか映らない。

同じ気持ちなのであろうグレイもああいうのは慣れだと言いたげに笑っている。

「あんなの、あいつからしたらお遊びみたいなものだ」

「それがリイリスです」

そのお遊びで現在もノックダウン中のナツは一体。

「じゃあ、あの子が本気で怒ったらどうなるのよ」

「——ツ!!」

「ちよ、ちよつとどうしたのよアンタたち？ 急に震えだして……」

ちよつとした好奇心で聞いた質問はグレイとハッピーの突然の変わりように打ち消された。どうにも触れられたくない話題だというのは異常な震えを見るに明らか。

「あ、あ、あ、あんなこと思い出したくもねえッ、お、お、オレはあの時、リイリスに――」

「ガクガクガクツ!!」

「お、オイラ怖さで気絶するなんてはじめてだったよ……絶対リリスだけは本気で怒らせちゃダメなんだ——ブルブルブルツ!!」

この様子だとしばらく戻ってこないだろうと自分の殻に閉じこもる彼らが何におびえているのか知りたいような知りたくないようなと思いつながら、いくらなんでも大袈裟だろうと心の隅で楽観視するルーシイだった。

だが、すぐに彼らが言っていた本当の意味を思い知ることとなる——。

「あれ、リリスは?」

風呂を終えたルーシイはさつきまで正座していたリリスがどこにもいないと部屋を見回しながら、ベッドに腰かけゆったりしていたエルザに声をかける。

「あいつなら汚いの洗い流しに行くだとか言っただけぞ。まったく説教の最中だというのに」

「あの子……女の子としての自覚あるのかしら……って、そもそもトイレならすぐそこにあるのに、なんでわざわざ外に?」

「ん? それもそうだな。なにか用事でもできたのだろうか」

よもや説教から逃げたわけではあるまいなど機嫌を悪くするエルザにビクビクしながらリイリスの帰りを待つも、なかなか戻ってくる気配がない。いつまでも待つていても仕方ないとエルザも風呂に入るとその場を離れた。

さつきの騒動で疲れきつて、ベッドの側面に背を預けてうたた寝していたグレイも目を覚ますと、彼もリイリスが何処へ行ったのか気にかけたが、当の本人がいなければ話にならない。

そうこうしている内にエルザも風呂から上がり、全員が揃うのに残るは気絶中のナツと出かけているリイリスを待つのみとなった。

それからしばらくの間各々が自分の時間を過ごしていると。

「——ッ！　なんだ……嫌な予感がするぞッ」

直前まで意識のなかったナツが弾かれたように体を起こし窓の外を睨む。その先で良くないことが起きているとでもいうのか、その瞳は険しく見開かれていた。

「どうしたのよ急に？」

「リイリスはどこに行つた！」

「外に出たきりまだ戻ってきてはいないが……」

「そのうち戻ってくるだろ。あいつもそこまで子供<sup>ガキ</sup>じゃねえ」

その後もしきりにリイリスの事を気に掛けるナツを何度も落ち着かせ、時間つぶしに

と幽鬼ファンタムロードの支配者の事や聖十大魔道について話し合った。しかしそれでもこの日、リーリースは戻らなかつた――。



一方、現在妖精フェアリーテイルの尻尾で話題の中心ともいえる幽鬼ファンタムロードの支配者のギルドにて、怒号が行き交っていた。

その内容はというと。

俺たちのギルドが汚された!!

誰があんなことをしやがったんだ!?

ふざけたラクガキ残しやがって……!!

絶対見つけ出してぶつつぶしてやるツ!!

と言った穏やかでないものばかり。

夜の時間帯にも関わらず、彼らの起こす喧騒は外にまで漏れているほど。

そんな騒ぎを打ち消す勢いでギルドの扉が中にまで吹っ飛んできた。扉に吹き飛ばされて死にかけの虫のようにピクピクしている者や下敷きになってもがく者までいる。

何事だと彼らの視線が集まった先から、乱暴に踏み鳴らす足音がギルド内に入り込ん

できた。

「あ、あんたはッ!？」

「が、ガジル!?! どうしたんだその格好はッ!!」

その人物はファントムにおける最強の魔導士——ガジル・レッドフォックスであった。

ギルドにおいても彼の實力は誰もが知り認めているほどで、どんな依頼でも怪我一つ負うことなく達成するその強さに絶対の信頼すら抱く者も少なくない。

なにせガジルは鉄の滅竜魔導士<sup>ドラゴンスレイヤー</sup>。その体質から他の攻撃を通さない鉄壁の体でもあるのだから相手になる者の方が少ないくらいだ。

しかし今のガジルの姿は信じがたいものだった。

「ふー、ふーっ!! クソっ、クソ! クソがあッ!! あのクソガキ……ッ、絶対ぶつ潰す!! あいつだけはこの手で……ッ!」

額から流れる血、顔には痣があり、服のあちこちは破け、口にも血の跡が見える。

見るも痛々しい姿で足を引きずりながら奥へ消えていく彼の状態は明らかに普通ではなく、血走った眼には殺意が揺らめき目的の人物とやらに対する強い激情を抱いているのが見て取れた。

一体なにがあつたのか、彼を目撃した者達はガジルに対してもだが、なにより彼をあ



そこまで痛み付けた相手にそれ以上に畏怖の念を抱くのだった。

## 解き放たれる怒り

フェアリーテイル  
妖精の尻尾の地下にある倉庫は今は、フアントムによって壊された上の酒場の代わりとして使用されている。

そこにギルドのほぼ全員が集まっているのだが、誰一人として言葉を発することなく皆一様にあるモノを見つめていた。

妖精の尻尾の魔導士、レヴィ・マクガーデン。

シャドウギアのリーダーである彼女の腕には、血に塗れたボロボロの黒いジャケット。その持ち主はここにはいない誰かのものであり、その誰かが問題だということ。

唯一の手掛かりとなるのはジャケットに張り付けられた紙。そこにはこう書き記されている。

〃そちらのギルドメンバーの一人を預かっている。

こちらに彼女を傷つける意思はない。故に彼女と邂逅することを条件とした親睦会、並びに今回の非礼のお詫びも兼ねてギルド間の交流を深めたい。諸君等の来訪心よりお待ちしている。

ファントムロード  
幽鬼の支配者ギルドマスター —— ジョゼ・ポーラ ——

「これは、どういう事だよ……ッ!」

あり余る悔しきや怒りを震える体で訴えるナツはまるで理解できない、したくないと歯を食いしばりここにいる全員に叫ぶ。

「なあ!! 一体どういうことなんだよッ!!」

昨日に引き続きまたもファントムからの宣戦布告とも取れる行いに、我慢の限界をとうに超えて溢れる激情を吐露する。

この手紙の内容にはではない。問題はここにあるジャケットがリリスのもので、当の本人がここにいないということだ。

「……私たちがファントムに襲われている所にリリスが助けてくれたの……それではないかとジェットとドロイを安全なところまで避難させた後、彼女を探していたんだけど……」

「そこでこれを見つけたってわけか」

グレイの続けた内容にこくりと力なく頷くレヴィ。その表情には疲労の色が濃く、泣き腫らした目には隈があり彼女が一睡もしていないと伺わせるに十分な顔色の悪さだった。

昨日の夜、レヴィとジェットにドロイの三人は外を出て回っていた所に背後から襲わ

れジェットとドロイが彼女を庇い怪我を負ったのだ。幸い二人とも命の危険はないそうで、今は病院で安静にしている。

「レビイ、その時の事をもう少し詳しく話してくれないか？」

こんな時こそ冷静に話を進めるようという姿勢を見せるエルザの言葉に今度は強く、そしてはつきりと頷いた。

夜に包まれ静まる街の中、広い路地をレビイ、ドロイ、ジェットの三人チームが「ジャドウギア」が歩く。

「いいのかレビイ？」

「ラキ達と女子寮にいた方がいいんじゃないか？」

「いいのいいの。私たちチームじゃん？」

「レビイ〜!! ——ッ！」

語尾にハートでも付いてそうな間の抜けた声でリーダー意中の相手の名を口にする二人にまっすぐな笑顔を向けていたレビイは、彼らが何かに気づいた素振りを見せた後、焦った様子でこちらを突き飛ばしたことに驚きの声を上げる。

「ち、ちよつと!？」

いきなり何をするんだと、尻もちをついた大勢で二人に抗議しようとしたが。

「ぐうっ!!」

「れ、ビィ……ッ」

柔らかいものを叩きつける鈍く嫌な音がすぐそこから鳴り渡った。

「ジェット、ドロイ!!? くっ、誰!!」

彼女はすぐさま状況を理解する。

——自分たちは何者かに襲撃された。

倒れこむ二人を気にする隙さえ与えてはならぬと警戒を露にする。

(いくら気が抜けていたとは言え、二人が一撃で倒されるなんてッ)

そんな芸当ができるのは魔導士、それもナツやグレイ。下手をすればそれ以上の、もしかすると——

その先のさらなる可能性。その最悪を否定したくて、レビィは襲撃者を視界に収める。

「——そんなんっ!!」

「ギヒッ」

(最悪だッ、よりによってコイツ!?)

鉄の滅竜魔導士。  
ドラゴンスレイヤー

鉄竜くろがねのガジル”の異名を持つファントムきつての魔導士。

レビイの頭の中で、この者と真つ向から立ち向かえるのはそれこそナツやグレイ、エルザといった実力者しか思い浮かばなかった。そんな彼らでさえ苦戦し得る強さを持っているのだ。

こんな相手、ましてや自分一人で敵うわけ。

「おい、ブーツとしてつと潰しちまうぞ?」

「しま——ッ!」

暗く沈む思考に気を取られたほんの一瞬、意識を戻せばすぐそこに凶悪な顔をした鉄竜のガジル。

レビイは何も出来ずに倒れゆく自分の姿を幻視し、来たる激痛に恐怖を堪えて待つしかできなかつた。

硬く握りしめられた拳が彼女に届く。

「——ッ!?!」

刹那、ガジルの顔面にブーツがめり込んでいた。

「えっ!?!」

「つりゃあアアッ!!」

何者かがそのままガジルを蹴り抜いたことで猛スピードですぐ隣の建物に衝突し、瓦

礫の破片を飛び散らせながら大きく崩れた瓦礫に埋もれた。

「はっ、はっ、ギリギリセーフ。いや、ハッ、アウト、かな……これはッ」

色素の抜けた紫色の髪を風に揺らし自分よりも小さい体で力強く、それでいて頼もしさを与えてくれる立ち姿でギルドで見る時以上に心から安心させてくれる彼女は――

「り、リイリス!?! なんでここに!」

今頃ルーシイの家でお泊まり会をしている筈の少女がどうしてかここにいた。

「はー、はーっ…… アタシはただ、汚いクソ野郎の気配を感じたから、そのまま洗い流そうと思って、直感でここまで来ただけ」

（直感って。ルーちゃんの前からここまで距離はだいぶ離れているのに……でも、嘘をつく娘じゃないし。それに息を荒げてるってことはここに来るのに走ってきたってこと……!?!）

そんな本当か嘘なのか分からないことを口にするリイリスは、ガジルの飛んでいった方を睨み続けている。

「これも惚れた弱みってやつ? 二人して庇っちゃってさ。カツコつけちゃって、まったく。」

でも、こいつらのおかげでアンタだけはこうして守れた」

まさにギリギリのタイミングでリイリスはレビイの身を守ったのだ。二人の漢を代

償として――。

彼女がここに着いた時には既にガジルによってシャドウギアが襲撃される直前であったのだから。

その言葉にハツとしたレビイは倒れているジェットとドロイに駆け寄り、意識が混濁している二人の顔が辛そうに歪むのを唇を噛み、『この二人のおかげで私は無事であるんだ。』なら、二人の為になにかしないと！』そう強く決意を固めた。

「視界の悪い夜に背後からの不意打ちなんて。随分と妖精がお怖いようで、亡霊さん？」  
「ああ……？ 舐めたこと言ってくれんじゃねえか、クソガキ。何者だ、テメエ」

あれだけの勢いで壁に激突したのにも関わらず、瓦礫を掻き分けて出てきたガジルは信じられない事にどこにも傷を負っていなかった。

（あんな強い一撃を受けたのにまったくダメージがないなんて……！ やっぱり、リリスじゃこいつ相手になんて勝てないよッ）

内心諦めかけるレビイとは対照に、ガジルの健在さを見てもまったく動じることのないリリスは、そんなこと分かっていたと言いたげな冷めた瞳を威嚇をしながら問い詰めるガジルに向ける。

「アタシは……」

一度その瞳を閉じた後、もう一度見開き今度は熱く燃える眼で真っ直ぐ見据える。



そしてこれから吐き出す想いを前に、息を大きく吸い込み堂々と名乗りを上げた。

「アタシは妖精の妖精フエアリーテイルの尻尾の魔導士——リイリス。

今からアンタをぶちのめす!!」

右腕をガジルに向け掌を見せつける彼女の振る舞いは、掌てのひらに刻まれた赤色のギルドマークをしかとその目に焼き付けろと言っているかのようだ。

そう、これこそが自分の誇りであり戦う意義だと言うように。

「ハッ、なるほどね。てめエ、妖精の尻尾けつぽのモンか。それでギルド荒らされた腹いせしに來たつて訳か」

「その通り。ギルド壊したのアンタだろ？ あの時本気で怒り狂いそうで久々に食たいまくったよ」

「ギヒッ！ そうかい!!」

（食たいまくったつて、まさか食べ物を？）

大量の食べ物をやけ食たいするリイリスを想像したレヴィが、結構しつくりくるかも。なんて思ってしまったのはここだけの話。

一方、短くも簡潔に交わされていた二人の会話は、ガジルの突進によって終わりを告げた。

砂塵を巻き上げ獰猛な笑み——肉食獣のそれを思わせる彼の気迫は離れているレ

ビィさえ怯むほど。そんなものを真正面から、しかも目で追うのもやつとなスピードで振るわれる拳を前にしても、リィリスは引く姿勢を見せはしなかった。

響く打撃音。

(ガジルが放った拳を自分の拳で相殺したッ!?)

なんと鉄竜の名を持つガジルの拳をリィリスは避けるでもカウンターをするでもなく、自らも繰り出した左拳でガジルの右ストレートに合わせ二つの拳を組み付かせていたのだ。

どう見ても二人の体格差は歴然としている。だと言うのに打ち合わされた拳は拮抗していた。

彼女の予想外の動きにまさかと目を見開くガジルだったが、徐々に押し返される自身の拳にさらなる衝撃を受ける。

力負けしているのだ、まだ子供と言える少女に。

その事実にとつてもない怒りと恥辱で反射的にガジルは魔法を使い、右腕を鉄に変質させると同時に強化された身体能力に物言わせ、少女の小さな身体ごと突き出す。

鉄に変化した彼の拳はそのまま猛スピードで伸長し、リィリスを拳ごと弾き返した。

鉄竜棍<sup>てつりゅうこん</sup>

彼の得意とする攻撃魔法。自身の体質を鉄に変化させる滅竜魔法で繰り出されるそ

の一撃は、並の魔導士であつても大ダメージは確實。

それを証明するかのように、弾かれたリイリスの拳には血が滲み早くも赤く腫れ始めていた。

この機を逃すものかとすぐさま追撃を仕掛る。

圧縮される時間の中、獲物リイリスに向かう捕食者ガジルの目には、あまりの威力に後方へ飛ばされながら宙に浮き体制を崩したリイリスが無防備を晒す姿が映っていた。

二撃目の鉄竜棍を左腕で放ち勝負を決めに行く。

女子供がどうしたと、容赦なく伸び進む致命の鉄撃は彼女の中心を捉える。

だが――

「なにッ!?!」

リイリスは後ろに引かれる慣性に抗わず、上半身の捻りだけで体を反転させ鉄竜棍を回避してみせたのだ。それだけに留まらず、ガジルの伸ばされた左腕を無傷の右腕と胴を使う事で拘束。それと同時に地に足が付き、そして。

「つらああアアアッ!!」

「うぎガアッ!?!」

渾身の背負い投げ。

とても少女の出せるとは思えない力で投げられたことで、伸び切った鉄腕を起点に人

間ハンマーさながらのガジルは受け身も取れず、なすすべもないまま轟音と共に地面に沈む。直後、意識の霞む衝撃が全身を等しく襲う。

こんな隙を見せてしまえばつけ込まれる。体に染み付いた闘争の動作によりすぐに体を起こし、鉄竜棍を解除する。それにともない拘束されていた左腕が自由になった事で反撃に移れる姿勢となった。

焦りと憤怒の混じった眼差しを背後にいるリイリスに向けようとしたガジルは不意に横からくる不自然な風の動きに再び体を地に伏せる。

頭上を駆け抜ける疾風、それがリイリスによる蹴りである事は視界の端に映る彼女のブーツが語っていた。

身体能力向上の魔法。

これがガジルの導き出したリイリスの使う魔法の正体。

であれば圧倒的な体格差を埋める力、スピード、運動能力にも納得できるからだ。

なればこそ、勝利は我にありと確信する——ガジルから発せられる空気が変化した事に気づき、息を飲んだリイリスは後ろに大きく跳躍し距離を取る。

「どうした。ビビっちゃったか？」

「な、なに……あれ」

「竜の鱗、それも鉄……」

ガジルの身体を覆う鋼鉄の鱗。

それはガジルの奥の手であり全ての攻撃を無力化させる無敵の鎧。しかも厄介なことに鉄の鱗には攻撃力を底上げする効果もあるのだ。

こうなれば最早どう足掻こうと生身で傷つけることは叶わない。いや、武器や魔法だろうとこの鉄竜の鱗の前では驚異足りえない。

「ギヒヒツ、終わりだ。クソガキ」

一方的な勝利宣言。

時間にすれば戦いが始まって一分と経っていないだろう。しかし、当事者達からすれば時間以上の濃密すぎる戦いの前に、レビイは逃げるでも加勢するでもなく只々啞然とするしかなかった。

(正直……リイリスがあそこまで強かったなんて予想もつかなかった。もしかしたらナツ達とも渡り合えるかも。でも、相手はあのガジルで、しかも本気で来ようとしている……)

勝てるのだろうか、彼に。

フェアリーテイル妖精の尻尾において、リイリスの実力はナツより一步劣るといのが総評だ。

と言うのも、ナツ恒例の勝負のふっかけに何度も嬉々として応じ、毎回それなりにいい勝負はするものたまに勝つくらいで負けてしまう事が多いからだ。それでもギル

ドの中での強さでいうと真ん中より少し上に位置する。

使う魔法は彼女いわく身体能力強化とのことだが果たして本当だろうか？

ただの身体能力強化の魔法でファントムのトップの一人であるガジルとここまで均衡するものなのか。長年修練を積んできたベテランの魔導士ならいざしらず、彼女の使う魔法がそれ以上の力に見えるのは鼻屑目で見ているからなのか。

「レビィ。ジェットとドロイを連れて早くここから離れる」

それなのに彼女から飛び出した言葉はあまりにも無謀なものだった。

「そ、そんなことできるわけッ——」

「邪魔だつて言つてんの。それとこの事はギルドのみんなには言わないこと。余計収集つかなくなるから」

確かにレビィは近距離での戦闘に向いていないし、遠距離からの魔法での支援をするにしても今のガジルに通用するかどうか怪しい所。

（たしかに二人を早く病院に連れていきたい……！　でも、それで仲間を見捨てて逃げるだなんて出来ない!!）

そんな想いを伝えようとレビィが口を開いたところで、リィリスが深く息を吐く。

「分かんないかなー。アタシがアンタ達を傷つけるかもしれないってこと」

「え？　——ッ、危ない!!」

俯き何かを堪えるように肩を震わせ始めるリイリスに出来た隙を見計らったのだろう、何かを叫びながらガジルが彼女に向かい腕を剣のような形に変えて突進してきた。

しかし、それを見ずにして彼女は鉄の剣をあつきりと躲してすぐ近くまで来ていたガジルの下顎を殴り上げた。だが鉄竜の鱗の効果で全く堪えていない。むしろ殴った側の彼女の拳にダメージが刻まれた。さらにお返しにと、今度は脚を鉄に変質させてリイリスの横つ面を蹴り抜く。

鮮血が彼女の口から舞った事でガジルの顔に笑みが浮かぶ。

「ギヒツ、もろに入ったな。今ので脳が揺さぶられただろ」

「——<sup>ギルド</sup>家を壊されて、目の前で仲間<sup>家族</sup>までも傷つけられた」

「ああ?」

不自然なくらい、リイリスの声だけが妙に響いていた。まるで彼女の声に何か目に見えない力が宿っているような、それでいてとつともなく強く恐ろしい何かが見え隠れしているようだ。

なぜ忘れていたのだろう、彼女が一度だけ見せた規格外の力。これはそう、まるであの日と同じ。

「痛みと怖さで震えてんのか?」

全身を震わせる彼女に容赦なくガジルは殴り、蹴り抜き痛み付けていく。鋼鉄の鱗に

より強化された攻撃は一撃一撃が身体の芯まで届くもので、そんなものを少女の体が食らい続けられればひとたまりもない。

このままではリイリスが危ない。仲間がすぐそこで傷つけられているのに、しかしレビイは目を離せずにいた。

いつもギルドで馬鹿騒ぎをしてナツ達とケンカする時に見せる時とは違う、本当の怒り。

今の彼女に水を差してはいけなさと無意識の下した判断ゆえだ。

リイリスがいつもなら考えられないくらい低く唸りに似た声で言葉を紡ぎ続ける。

「ぐっ——ガ！ ツ、アタシはねレビイ！ コイツ等にも、そして——」

自分にも怒ってんだよ。

「ツ!？」

「なっ——てめエ、一体……!？」

リイリスの髪が僅かに逆立ったと同時に、これまで感じたことのないレベル、もしかするとエルザさえ上回るかもしれない魔力がその場を支配する。

空気が震えるレベルの魔力の渦の中で漠然と思つたこと。それは、本気で怒っている者を見ると怖いとか逃げ出したいと思うのではなく、頭が真っ白になるのだ。レビイが抱いたものは、そんな当たり前のものだった。



これは怒り。

決して本気で怒らせてはいけない、触れてはならない怒りが詰め込まれた禁忌の箱はとうの昔から開いていたのだ。それが目に見える形になっただけ。

勝者の笑みを崩さなかったガジルが一転、一瞬で焦りを多分に含んだ表情へと変え、怯むように後ろへ一歩下がろうとする——それが合図になる事とも知らずに。

「怒竜の——」

一歩宙を踏み出す。

それだけでガジルとの距離が詰まる。リイリスは僅かに跳躍したこちらへ驚きに満ちた顔を向けるガジルを眼下に捉える。

その後の地の底より轟く怒れる竜の言葉は最後まで聞こえることはなかった。なぜなら……

耳をつんざく鈍くも遠くまで響く打撃音の直後、ガジルは顔面から地面に埋まっていたのだから——。

「リイリスが……」

「あいつそんな強かったのかよ……ッ」

話に出たリイリスの実力はみんなの知る彼女より数段も上の強さを持ち合わせており、それはつまり今まで本当の実力を見せていなかったという他ない。

ナツやグレイの心になぜそんな大事な事を隠していたのだという憤りが生まれるも、しかし今はそんなことを考えている場合ではなく、彼女の安否を確かめることを優先すべきと頭を冷やす。

「しかしガジルを撃退したというなら、何故リイリスはここにいない？」

他にも驚いたり戸惑っている者がいる中、エルザだけは淡々と話を進めていく。レビイもここからが大事な場面だとさらに真剣な表情で話の続きを語り始めた。

「……リイリスは間違いなくガジルを倒したよ。ほんとに凄かった。」

でも、喜んでる暇なんてなかったの。もつとヤバイ奴がそのあと現れたから……」  
「そ、そんなぶつとんだ奴がいるなんて……」

そんな悪夢がある訳ないと祈るように呟くルーシィに容赦なく現実を突き付けたのは、ギルドの者達をかきわけ一番前に入る一人の老人——マスターマカロフ。

「マスタージョゼ。そうなんじゃろ？ レビイ」

ジョゼ・ポーラ。

その人物は幽鬼ファントムの支配者のマスターであり、マカロフと同じ聖十大魔道に名を連ねる真正正銘の強者。

数いる魔道士の中からたった十人しか得ることの出来ない称号——  
 // 聖十大魔道

それこそが並外れた力を持つている事をなによりも証明するもの。

震える身体を両手で抑え、昨晚レヴィが目にした出来事の最後の一端を語りだす。

「お見事ですすよ。まさかガジルさんをたった一撃で敗るとは」

相手を小バカにする拍手を鳴らし、芝居がかった話し方で夜闇から溶け出すように現れた人物。

ファンタムロード  
 幽鬼の支配者ギルドマスター、ジヨゼ・ポーラ。

リリスを誉める言葉とは裏腹にジヨゼから発せられるのは仄暗い魔力。それも彼からしたら挨拶にすらならない魔力の揺らめき。

そんな魔力の一端を感じたレヴィの心は、たったそれだけで震え上がった。

——格が違う。

あのガジルさえ遥かにマシと思えてしまうレベルの禍々しく暴力を孕んだジヨゼの魔力に、頭から流れる一筋の血を気にもせず真っ直ぐ見据えるリリスの魔力も凄まじく、ガジルとの対決を経て戦意に欠片ほどの乱れもない。

やはりルーシイの家から感じた特大の悪意はこいつからだったか——そう確信したリイリスは脅えているだろう仲間に鼓舞する。

「レビイ!! 走れエツ!!」

この場においてただ一人、ジヨゼに立ち向かう闘志を燃やすリイリスの叫声で、反射的にレヴィイはジェットとドロイの首根つこを掴み全力でその場から離れる。

彼女の言葉が恐怖で身動きが取れなかったレビイを突き動かしたのだ。

それを受けて仕方ない状況だとは言え、リイリスを置き去りにしてしまったと心が張り裂ける想いを胸に彼女はひたすら走り続けた。背後で魔力同士のぶつかる大爆発を受け背中を押される形となったレビイの足は速く、恐怖や不安を降りきる勢いで前に進み続けた——。

その後、なんとかドロイとジェットを魔導士の受け入れ対応をしてくれる病院まで連れ急ぎ、一秒と休まず再びリイリスのいた路地地に向かったが、そこには血に濡れた彼女のジャケットと一枚の紙があるのみだった。

「最低だよ、私ツッ! リーリスを見捨てて逃げて……怖くて後ろも振り向けなくてッ」  
「お前は悪くない……そうすることが最善だったんだ」

リイリスのジャケットを抱きしめ、あふれ出す涙が零れるレビイ、そんな彼女の肩に手を置きエルザが優しく言葉をかける。

もしも、レヴィがいなければ今頃どうなっていたか、ジエツトとドロイを病院に送り届けることも、こうしてギルドのみんなに何があつたかを伝えることもできなかつたのだから。

「私が……私がいけないんだッ！ あの時もつとあいつの事を気にかけていればこんなことには……！」

昨日の楽観視していた自分に情けなさ以上に腹立たしさを覚えるエルザの心境に口を出す者はいない。そんなのはなんの慰めにもなりはしない、今することは一つとここにいる全員が分かっているからだ。

ボロボロとなつたりリスのジャケツトを無言で見つめるマカロフはなにを思うか。そんな聞かなくても分かる答こたえにフェアリーテイルの魔導士達は自分達がなすべきことを明確に理解していた。

後悔していても何も始まらない。それを深く理解しているエルザは、頭を冷やしこれより先の行動を促す。

「律儀にこんなものを残すとは、挑発のつもりか誘い込んで罠に嵌めるつもりなのか——いずれにしても」

「罠がどうしたよ……ッ」

「全部まとめてブツ飛ばす!!」

エルザの言葉を引き継ぎグレイとナツが吼える。それに続きエルフマンやカナ、ロキにマカオにワカバ、アルザック、ヴィスカ。あのナブすらも声を上げていき、次々と妖精の尻尾が一人の娘の為、立ち上がり闘志を滾らせる。

ルーシイは初めて目にするギルドみんなの並々ならぬ圧力に圧倒される。

これが「フエアリーテイル」。

「ボロ酒場までならガマンできたんじゃないかな……」

満を持して族長が口を開く。

「ガキの血みて黙ってる親はいねえんだよ——ッ！」

目覚めさせてはいけない巨人が血走った目を、己たちが倒す相手「ファントムロード幽鬼の支配者」の

ある方角へ向け、ついに——

戦争じゃ。

ギルド同士による戦いの火蓋が切られた。

## 人質

ファントムロード  
幽鬼の支配者のギルドでは未だ冷めやまない怒りの声がそこかしこから上がっていた。彼等にとって他人をバカにし蔑むのは好ましくても、逆にされるといいうのは我慢ならないのだろう。まさにそれこそがこの者達のギルドの品格そのものと言える。

「どこの誰だか知らねーがふざけたヤローだ……！」

「あんな真似するやつは俺が痛めつけてやるッ」

「そうだ！ 俺達のギルドの看板にラクガキしやがってエ!!」

普段はやれ、依頼主を脅したら報酬を倍にしやがった。あのギルドが気に入らねーから潰しに行く。あそこで見た女をものにしてえ。など、下衆下劣下品と三拍子で吐き出す悪意に染まった言葉の数々が飛び交うのが日常だったギルド内は、今この時だけは正当な叫声が響いていた。

「気晴らしに妖精の尻尾けつぽにちよつかいかけてくるか？ 何人かやったガジルにだけおいしい思いはさせるかってな」

「そりゃいい！ 今頃みじめに震えながら飛び回っている頃だぜ」

先程までの空気から一転、水を得た魚のように生き生きと化したファントムの者達は、昨夜目にした傷付き怒りを露わにしたガジルのことも忘れ、目の前の娯楽に興じることにはしか意識が向いていなかった。

だが彼等は気づいていない。そのガジルが誰にやられたのか、自分たちが敵に回したのはどんな存在なのかを。

二人組の男が意気揚々と扉に向かい、開こうと近づいた所で——扉ごと吹き飛ばされた。

何人かも巻き込み遙か後方へ吹き飛ばされた男達は扉と共に沈黙した。

ゆらゆらと煙に揺れるいくつもの人影。そこから現れたのは。

「妖精の尻尾じゃああアアっ!!」

妖精の尻尾の魔導士達だった。

彼等全てが等しく天をつく怒りを抱き溜まりに溜まった激情を、仲間家族を傷付けられた傷みを、仲間を奪われた怒りをこいつらにぶつけるためにここへ来た。

まさか、縮こまっている事しか出来ないだろうと見下していた相手が総メンバーで仕掛けてくるなど、誰も思わなかったファントムにとって、それは致命的な隙を生み出し妖精の尻尾の侵撃を許す事につながってしまう。

「リイリスを返しやがれえエ!!」



一番槍となったナツの叫びと共に彼の周りにいたファントムの連中が炎に巻かれ吹っ飛ぶ。

流れは完全にこちらのものだど妖精の尻尾の他の魔導士達も内に燃え盛る忿怒を吐き出す。

グレイが殺意のこもった眼差しで凍らせ、エルフマンは右腕を凶悪な魔物の物に変化させ薙ぎ払い、カナやマカオにワカバは遠距離からの攻撃、アルザックとヴィスカによる弾幕の共演。

どれも並大抵の努力では生み出せない一流の魔法だ。

「妖精の尻尾《けつ》風情がっ！ ファントムをなめるなよ!!」

それでも国を代表するギルドとしての誇りからか、ファントムの魔導士としての意地か、<sup>フェアリーテイル</sup>妖精の尻尾に負けじと啖呵を切る。

「なにが<sup>ファントムロード</sup>幽鬼の支配者だ。パンツロードってテーマえらで書き換えてんじゃねえか!!」  
「あれは昨日だれかが落書きしてっただよっ!!」

ファントムが言うにはギルド名の書かれた表の看板が何者かに白色と黒色で「パンツロード」といたずら書きをされていたらしい。

つまり――

PHANTOM LORDのところP●ANTS♡LORDという事になる。

これは怒る。

一体だれの仕業か、妖精の尻尾の魔導士達が思案しすぐにその正体に行き着く。

そんな事をするのはあいつしかいないだろうと、前日に見せたある物を使つてのダメージを披露したここにいない彼女のこゝを感じ、より一層活力が漲り彼等を勢い付ける。

あいつは誰よりも先に仕返しをしてくれていたんだ。

妖精の尻尾のギルドの依頼板を見ればその証拠が出てくるだろう。

もつともこの先、被害者達が犯人を知ることとは一部を除きありえないだろう。さらに付け足すなら、マジックで書かれた文字は同じマジックの片側の色、つまりこの場合黒なら白を使い綺麗に塗りつぶさねば消えることはない。例え雨に濡れようが熱で焦がされようが消えることはないのだ。

その唯一落書きを直すことの出来るマジックペンは深々とどこかの板に突き刺さっているというわけだ。

『悪ガキを取り戻すぞおオオっ!!!』

激しさの増す妖精の尻尾の猛攻に、応戦していたフロントムの魔導士達は誰も彼もが大した反撃も出来ずに地に伏し、宙に舞い、次々とその数を減らしていく。

これではあつという間に妖精の世界に飲み込まれると、短期決着を見据えて何人かの男達が相手ギルドのマスター。マカロフに突撃を行う。

しかしそれこそが彼らにとっての運のつき。

『かああああアアっ!!!』

両眼に閃光を迸らせ魔法の力で巨人となったマカロフの巨大な手により、文字通り地に沈められた男達のうち一人が、他の者の総意として絞り出すように悲鳴を上げる。

「ひっ、ひいイイ!! バケモノオ!!」

『貴様等はそのバケモノのガキに手エ出したんだ——人間の法律で自分てめえを守れるなど、努々思うなよ!!!』

「何がギルドで交流を深めようよ!! ジェットとドロイを怪我させて、リイリスまで攫ったくせに……ッ、あんたらとなんて死んでもごめんだつてのッ!!」

“魔法の札”<sup>マジックカード</sup>で迎撃していた、カナ・アルペローナが妖精の尻尾の総意を口にする。  
「ギルド間での交流!? リイリス!? なんだそりゃ、聞いてねーよ!!」

そんな事は知らぬとファントムの誰かが言った。そこに騙している雰囲気はなく、初めて知ったという空気がファントムの連中から流れていた。それはつまりここにいる者達は何も知らないと言うことになる。

だからどうした。

大切なガキを二人も傷付けられ、一人は忌まわしきファントムに攫われた。何年も同じギルドで過ごしてきた家族にそんな仕打ちをされて黙っていられるわけが無い。

『てめエ等がおつ始めた戦争だ。今更知らぬフリは出来んぞオ!!』

地に轟く怨声を吐き出す巨人に<sup>マカロフ</sup>圧倒される中、いくつもの足場が組まれた木材の上で下の様子を眺める者がいた。

「クズどもが、せいぜい暴れまわれ。愛しのお嬢さん<sup>クツガキ</sup>を取り戻すことは絶対できねえがな」

今回の戦争の発端ともいえるガジルであった。

彼が昨日負った傷は驚くことにほぼ治りかている。脅威の治癒力は滅竜魔導士からくるものか、はたまた本人の身体機能からくるものか、いづれにせよ恐ろしい回復力だ。

それでも彼の傷付けられたプライドが癒えることはなく、今この時でさえリリスに對する憎悪は増すばかり。出来ることならすぐにでもあの少女を叩き潰し、泣き叫ばせ、許しを請わせてやりたいのだ。

しかし手を出してはならないと、ガジルに釘を刺すのは他ならぬマスタージョゼ。

彼に逆らうつもりのないガジルにとってそれが意味するところは――

「あのクソガキはお終いだ。うちのマスターに目エ付けられた時点で、この先まともに過ごすなんざ無理だ」

今後、リリスに恨みを返すことができないうという不満からくる眩きは誰の耳にも届くことはなかった――ただ一人を除いて。

「うらああアアア!!」

「——っ!? うおっと!」

下の階から飛び上がってきたナツが炎を宿した拳でガジルに殴りかかっきたのだ。それを寸でのところで飛び退き別の足場に着地したガジルに向けてナツは、優れた聴力で聴こえた無視できない呟きの内容に彼女の居場所を突き止めようと吠えた。

「今のどう言う意味だッ、言えッ!! リイリスはどこにいる!!」

「へっ、聞こえてたか。そういや、てめエも滅竜魔法だったな!!」

今、相対する二匹の竜が天にて衝突した。

嗅ぎ慣れない臭いに鼻腔が不快感を訴え、強烈な頭痛と背中に感じる鋭い痛みにより最低な目覚めの中、鉛のように思い瞼をゆっくり持ち上げていく。

「(ハハ)、は……っ?」

ボヤける視界に映る光景から、どこかの牢獄だろうというのは分かった。だが、ここがどこなのかという肝心なことまでは分からない。

一つ言えるのは、自身が捕らわれの身だということ。

壁に打ち付けられた鉄枷で両腕が拘束され、膝立ちの姿勢でなにもできぬようにされ

ているのが何よりの証拠。

強い頭痛の中で直近の記憶を手繰り寄せる。

たしか自分はレビイ達を逃がしたのだ。そして——その先の記憶を思い起こしたことでリイリスの意識が覚醒した。

「ちくしょう……ッ」

リイリスは敗けた。

ここにいると言うことが、なによりもそれを物語っていた。あれだけ威勢よく挑んでおいて、いざマスタージョゼと対決した結果こうしてファントムに捕まり無力を曝さらしている自分に腹を立てる。

それでもままったく敵わなかったわけじゃない。何もできず妖精フェアリーテイルの尻尾の名折れになつたわけじゃない。

あの夜、リイリスは目の前の仇敵ジョゼに怒りの赴くままに立ち向かった。

その怒りを糧とし膨れ上がったリイリスの魔力が、ガジルを屠った時よりもさらに上昇したことに驚愕したジョゼは、直前に加減してしまった彼女の一撃を顔面に受けることとなる。

顔が吹っ飛ぶかと思うほどの衝撃はジョゼといえど浅くないダメージを負ったことだろう。

まさかノーマークだった少女がこれほどの力を持つていたとは思ひもなかった。ジョゼは主菜の前に消耗するのは好ましくないと判断した。

よもやこんな小娘相手に保険を使う事になろうとはと、口元に歪んだ月を描き、そしてこちらしか見えていないリイリスの隙をつき無力化したのだ。

「まさかもう一人いたなんて……ッ」

突然背後から気配のしない何者かの手によって力を抜き取られ、次の瞬間にはジョゼの魔法——幽兵シエイトにより背中を一閃。魔力を激減された状態でジョゼの魔法を食らったリイリスが強い倦怠感と痛みに襲われた事で意識を失ってしまう直前、自身の血が飛び散るのを横目に見たのは、目が布で覆われた大男だった。

感情に流されるままに動き、もたらされた最悪な結果に怒りが再燃し始める。しかしいつもなら感じる魔力の昂ぶりを感じることはなかった。

いや待て、そんなはずは無い。

怒りとはリイリスにとって活力であり魔力生成の原動力でもある。怒ればその度合いに応じて魔力は上昇し続け、無くなることなどあり得ない。だが、それは魔力がゼロでなければの話。

つまり今の状態を表すことは。

「空からつって」と——？」

彼女に魔力は残されていないということ。

魔力というのは一度空になってしまつと、厄介なことに大氣中に浮かぶエーテルナノを取り込むのに長い時間がかかるようになってしまふ。それは一度に大量の魔力を空になつた状態で取り込む事体にも精神にも影響を及ぼす為、極少量の魔力しか生成できない状態に陥いるというわけだ。

仮の話として、もしも自身の魔力が強制的に外に出された際にそれを掻き集め取り込めば状態は回復するのだが、今においてはなんの気休めの話にもならない。

魔力の枯渇を自覚したが故だろうか、割れるような頭痛と全身の筋肉が悲鳴を上げ、身じろぐこともままならない程の激痛に襲われる。意識が遠のきそうになりながら、この状況に置かれる中での魔力が空という絶望感が少女の全身を冷たく震わせていく。

「お目覚めですか、リイリスさん？」

目の前の扉から届いた声に身体をこわばらせる。

ゆっくり開かれる扉から現れたのはマスタージョゼ。喜悅に歪む顔を隠しもせずにいる彼の腕には——ルーシイが抱えられていた。

「今、なんて言ったッ」



「今頃あのクソガキは恐怖に震えながら痛め付けられてるだろうってな。そう言ったんだよ」

幾度も拳を打ち合わせた両雄の身体中に打撃跡が見え隠れしている事から、激しい打ち合いを繰り広げていたと窺うかがえた。

その最中、ガジルから告げられたあまりに衝撃的な内容にナツの瞳孔は開かれ、呼吸も荒いものとなっている。

リイリスが痛め付けられる？

なんだそれは。

怒りや戸惑いよりも先に、なぜ。という疑問がナツの頭を駆け巡る。

仲間が傷つけられる？ あいつが？ 誰に？

さっきまで目の前の敵しか見ていなかった彼の頭には既にファントムの手に落ちた一人の少女のことしかなかった。

「ギヒッ!!」

「——ッ、ぐあッ!!」

呆然と立ち尽くすただの的となったナツに足で鉄竜棍を見舞う。

天井から叩き落とされ地面に激突したナツは、痛みを訴える体を無視してすぐに立ち上がる。話はまだ終わっていない、そう吼えようと口を開こうとしたが、間をおかずし

でもう一人何者が落ちてきた。

「じ、じっちゃん……?」

「魔力が、ワシの魔力が……っ」

自分達が最も信頼し本当の親のよう慕う人物、マスターマカロフ。

「マスターツ!! しっかりしろ!!」

「なんてこった……あのじーさんから、まったく魔力が感じねえぞ……ツ」

「そんじゃ、ただのじーさんになっちゃまったのか……!?!」

あれほど雄々しく滾っていた魔力は見る影もなく、それどころかまったく感じられない。

そのことに困惑しできずエルザをはじめナツやグレイやエルフマン、他の多くの者が立ち尽くすしかなかった。

たしかマカロフはナツがガジルと戦い始めてから最上階に構えるジョゼの所に向かったはず。事実、ついさつきまでは上でマカロフの魔力が激しく昂るのも感じた。それなのに今こうして力なく横たわっているということは――。

そんな信じがたい事実には、ありえないと呟く者や、一体上でなにがあったのかと声に出し始め、波紋のようにそれぞれに動揺が広がり戦意の萎む妖精の尻尾の魔導士達。

マカロフの戦闘不能による影響はそれだけでなく、敵側にも大きな影響を及ぼす。

これまでの劣勢が嘘のように、散々自分たちを蹴散らしてくれやがったなど今度はフアントムが勢い付く。

「やったぞ、これで奴らの戦力は半減だ!!」

『今だぶつ潰せえエエツ!!』

先程までの光景とは真逆の展開にうろたえる妖精の尻尾。精神的動揺は、なすすべもないままフアントムの反撃を許すという結果を作り上げていた。

油断していたカナを庇い深手を負うマカオ。雪崩れ込んでくる魔導士に押し流されるリーダーにワカバ。負傷者の数が増えていき状況が悪くなる一方。

今は悲しみに浸っている場合ではないと、現在この場で最も指揮権のあるエルザは撤退を決意するのだった。

「撤退だ! 全員ギルドへ戻れー!!!」

「バカな!! リイリスはどうすんだよ!?!」

「仲間を助けずして漢は退けぬのだー!!!」

「マスターなしではジョゼには勝てん!! 撤退する、これは命令だ!!!」

当然、リイリスを助け出すという目的を果たせずに撤退などできるかと声を上げる者たちが出てくる。彼らの想いはエルザにも痛いほどわかる故に心苦しきも人一倍感じるだろう。しかし今は一指揮官として、多くの者を無事にギルドに返さねばならない。

ましてや、最大戦力のマカロフが戦えないとあつては、マスタージョゼに太刀打ちするのは不可能。いづれにしても、ここは引くしかないのだ。

だが一人だけ、欠片も諦めていない者がいた。まだリリスがどこにいるかも分かっていないと、何か手掛かりはないか周囲に視線を巡らせ耳を傾けるのは、燃え盛る怒りの炎を燃やすナツだった。

「で、ルーシイとやらは捕まえたのか？」

「ッ!!!」

「悲しいな。ルーシイという小娘なら本部に幽閉している」

「だそうだ。オレらの本部はここから真つ直ぐ先に向かった丘にある。」

当然あのクソガキも一緒だろうよ。どうせ助けられねえだろうが、精々みじめに足掻

くことだなサランダー火竜」

滅竜魔導士であるナツの優れた聴覚によりガジルともう一人、いつからそこにいたのか布によって目が覆われた大男の聞き逃せない会話をしっかりと聞き取っていた。

最後にまるで助けに行かせるのを勧めるような言葉を放ったガジルは、隣にいる大男と共に景色に溶け込むように姿を消した。

彼がなぜそんな重要な情報を口にしたのか。ただの気まぐれか？ もしかしたら嘘なのか？

それがどうした。

そんなことを考えるのは後回しだと雑念を振り切り、怒れる火竜はなにも言わず意を汲み取ってくれる相棒ハッピーと共に進撃を開始した。

## ルーシイ

「デカパイちゃん!？」

思いもよらない人物の登場にリイリスが驚きの声を上げる。しかし彼女の発した言葉で場の空気が些か妙なものと化した。

「でかば——? やはりお知り合いのようですね」

ひび割れた床に降ろされたルーシイは力なくそのまま横たわる。どうやら意識がない事と彼女も両手を縄で拘束されている事から無理やり連れてこられたらしい。

一体何が目的でこんな真似をしたのか、そう訴えるリイリスの瞳を受けるジョゼは薄ら笑いを浮かべ見下した視線を送り返す。

「まさかご存じでない? いけませんねえ、すぐそこに大金が転がっているのに気づかないなど」

「は? 大金……? もしかしてその娘のこと言ってるの?」

待ってましたと言わんばかりの声音でジョゼはルーシイに手のひらを向けて彼女の本名を明かした。

「そう、この方こそルーシィ・ハートファイリア嬢その人です」

「ハートファイリア……?」

ジョゼの芝居がかった物言いに眉を潜めて不快さを表に出すリイリスであったが、徐々に眉のシワを深くしていき合点がいったと鼻で嗤った。

「ふんっ、なるほどな。超大金持ちの娘を拐って身代金せしめようなんて、随分しよっぱいことしてんじゃん」

「ハートファイリア財閥」<sup>コンツェルン</sup>。

この国を代表する資産家であり、ハートファイリア鉄道の経営者たるジュード・ハートファイリアの娘であるルーシィを使い、金を巻き上げようという魂胆なのだろうと目星をつける。

「誤解しないで頂きたい。私はただルーシィお嬢様を連れ戻せと、他ならぬ彼女の父上に依頼されただけなのですから」

連れ戻せということは家出か、もしかすると駆け落ちでもしていたのかもしれない。

ルーシィが資産家の令嬢という事実に関心驚いていたリイリスはしかし、妖精の尻尾フェアリーテイルで安く危険な仕事を体験してきたであろうルーシィの姿、とてもお嬢様らしさを感じられなかったが、生き生きとした振る舞いをしていたルーシィ。

半日にも満たない彼女との交流の中にあっても、リイリスはルーシィという少女の強

さと自分達に合った人間性を持つている事を感じていた。

「だからこそ、何故この場に自分とルーシイが囚われているのかをはつきりと理解することとなる。」

「アタシは人質の人質って訳か」

「察しが良いよう。そう、ギルドの仲間が目の前でいたぶられるのを見せられては、箱入り育ちのお嬢様も家に帰ると頷くことでしよう」

「まったくもって予想通りの下衆な企てに、恐怖よりも先に呆れてしまうと二度目の嘲笑が飛び出す。」

「はッ、どうかな。だってその娘と会ったの昨日が初めてだし——しかも初対面でおっぱい揉みまくっちゃったし……」

「昨日会ったばかりで、し、しかも胸を揉みしだいた……!? そんな関係なら尚更彼女は頷くに決まっているでしょう!!」

「いや、そんなんじゃないって。変な考えすんのやめてくれない?」

「誤解の生まれる言い方をしたリイリスもリイリスだが、勝手に話を変な方に膨らませたジヨゼも大概である。そりゃ引かれるだろう。」

「やれ、最近の娘どもはけしからん。やれ、はしたない奴らだの。果てには、いやでもそれも良いかもなど色々なものを口から零し始め、自分の世界に入ってしまった変態を



リイリスは汚物を見る目を向けて顔を目一杯しかめた。

彼女が誰かに対してここまで不快感を表すのは非常に珍しいことで、ギルドの皆が見たなら怒る以外で彼女にここまで疎まれる事があるのかと、逆に感心することだろう。

さつきまでのシリアスな空気はどこへやら。

しかしチャンスでもある。今の内にリイリスは自身の状態を細かく分析し始めた。

まずは背中の怪我だが、傷の方は既に塞がっているので問題ない——後で開く可能性が高いが考えないこととする。

一番問題なのは魔力不足。酷い頭痛が常に纏わりつき最悪な気分だ。それでも微量ではあるが回復してきている魔力だが、使っても普段の二割程度の威力しかない魔法一発が精々か。

ルーシィはまだ起きそうにもないが、この際その方が良いだろう。下手に起きてもらっても話が進んでしまうのでむしろ困る。

どうにかして、せめて鉄枷だけでも外せないかと音を立てぬよう脱出を試みるリイリスをジョゼの冷たい声が止めた。

「足掻いても無駄ですよ、あなたに魔法を使うほどの余力は残っていない。アリアさんの魔法で念入りに魔力を散らしておきましたからね」

まあ、例え魔法を使えたとしてもここから逃げるのは無理でしょうがね。そう言葉を

付け加えるのは、妄想を終え落ち着き払った態度でいるジョゼだ。しかしさっきのアレな一面を見せてしまっているので威厳も何も無い。

「アリア……あの時アタシから魔力を奪った奴か。なら、考えておかないといけないな。アンタをぶつ飛ばした後にするお礼を」

「そう慌てないでも、考える時間はたっぷりありますよ——あなたの命が続くまでね」

あの夜に感じた以上の、吐き気を催す邪気がリイリスにのみ襲いかかる。一点に集中し凝縮されたジョゼの魔力は凄まじく、リイリスでさえ怯み畏れを抱いてしまうほど。

「正直、昨日まであなたという人物にそこまで興味はなかったのですよ、私。

しかしね——」

床と靴を打ち鳴らす音が木霊し、淡々と語りだすジョゼに言い知れぬ不安を抱く。

「最近ちよつとした事がありました、その報復としてガジルさんとアリアさんを引き連れて、妖精を狩ろうとあなた方の街に寄ったんですよ」

「報復？　妖精を狩る……まさかっ」

何故昨日あんな時間にあんな場所でレヴィ達が襲われたのか、その疑問が氷解していき。

「張り切っていたガジルさんは獲物を見つけるや否や飛び出してしまって、成り行きと

は言え彼の犠牲となる雑魚には申し訳ないと思つたものです」

なにかが変わりだす予兆にリィリスの頬を冷や汗が伝う。

「しかしまあ、せっかくだからと見学することにしたその時、ガジルさんを蹴飛ばし想定外の強さを見せる少女が現れた——」

リィリスさん、あなたがね。

「ツ!!」

「ラクサスでもミストガンでもギルダーツでも、ましてやエルザでもなく、名のある魔導士でもないクソガキがツ、ウチのエースをぶつ潰してくれやがった……!!」

目の敵にしていたギルドの魔導士で無名のリィリスに、ファントムにおいて実質トツプとも言える魔導士を倒された事実には激情を吐露する。

気に食わない、こんな隠し球を用意してやがったのかあのギルドはツ。

怒りすら踏み越えた殺意が多分に含まれた魔力が一瞬周りに噴き出す。その余波を受けルーシィが苦しうに身じろぐ。

あれではもう少しすれば起きてしまうだろう。それまでなんとか時間を稼がねばと、リィリスは信じる仲間を想い口を開く。

「他人の街に来ていきなり襲つておきながら、ちよつと抵抗しただけで逆ギレなんて大  
人気がくない?」

「ちよつとした抵抗……？ テメエがやった事はそれだけじゃねえだろ。オレの顔をぶん殴り、あまつさえウチのギルドの名を貶めやがったろうがクソガキがアツ」

紳士的態度から豹変したジョゼは隠し抱いていた怨恨を暴言に乗せリイリスにぶつける。

家を壊された仕返しとして、リイリスがファントムのギルド看板を書き変える所を誰かに見られていたらしい。

先にちよつかいだしてきたのはそつちだろうといつもの彼女であれば言い返しただろう。事実、その言葉が喉元まで出かけていた所を口をつぐみ抑え込んでいる訳だが、今は魔力がほとんどなくこうも無防備を曝している中で下手に刺激を与えるべきではないと、冷静に判断しての沈黙であつた。

こんな悪意の満ちた「怒り」を向けられたのは初めてかもしれないと内心危機感を覚えるリイリスは、この状態でジョゼの魔法をぶつけられれば只では済まない、喉元にナイフを突きつけられているような恐怖の中、それでも虚勢を張るため逸らしてしまいうそになる瞳を真つ直ぐ向け続ける。

こんな男に弱みを見せてはならないという一心で。

「テメエをここに押し込んだのはハートフィリアの娘を脅すためだけじゃねえ。テメエを痛めつけて二度とふざけた真似できねえよう殺してやるためだ」

ついにジヨゼの本心が姿を現しリイリスへと牙を剥く。

「やってみろよ。亡霊ゴーストのときに殺されるようじや妖精は務まらないんだよ」

だが、例え誰からであろうと売られた喧嘩は意地でも買う。それがどんな厳しい状況に置かれていても。

リイリスはジヨゼの怒りが昂るのを全身で感じながら、これはタダじや済まないだろうと他人事のように考えながら薄く笑うのだった――。

水滴の滴る音が耳につき、鉄錆のような嫌なニオイが鼻に纏わり不快な目覚めを強制されたルーシィは、弾けるように飛び起きた。

「えっ、な、なに!? ここんどこッ!?」

「遅いお目覚めですね。ルーシィ・ハートフィリア様」

「だれッ!?」

すぐそこから聞こえてきた男の声に警戒を露わに反応する。

「ファントムロード幽鬼の支配者ギルドマスター。ジヨゼと申します」

「ファントム……!!」

そうだ、たしか自分はあの後リイリスを助けに行こうと準備している間にみんなに置

いていかれ、今更自分一人が行ったところで変わりはしないと拗ねながらギルドに残ったのだ。

そのあと疲労と緊張で疲れ眠ってしまったレヴィの様子をしばらく見た後、ジェットとドロイに見舞いの品を届けようと買物に行く途中でファントムのトップに君臨する魔導士、エレメント4に捕ま<sup>フオー</sup>ってしまつたのだ。

「よくもレヴィちゃん達をツ、リイリスを攫つたわね……！ 許せないツ!!」

「そう仰らずに、あなたの態度次第ではそのリイリスさんの解放を約束する事も可能なのですよ?」

「つ、本当でしようね?」

思いがけない提案に訝しみながらも、どこか期待する様子を見せたルーシイにジョゼの口元がいやらしく弧を描く。

出入り口でもなんでもない壁しかない所でなにかを遮るように陣取っていた彼は、ゆつくりとルーシイに隠していたものを披露した。

「——え……?」

壁に打ち付けられた鉄枷で両腕を拘束され、身動きも取れない状態で血塗れとなり、今も全身から流れる血液が床を赤く染め血溜まりを作り出している。

呼吸は浅く今にでも生き絶えそうなほどか細い。

力の抜けきった小さな身体のあちこちに切り傷や青アザが刻まれ、無事な所を探す方が難しいほど。

あまりの痛々しさに目を背けなくなったルーシィだが、どこか見覚えがあると踏みとどまり、見てはいけけないと直感が囁くのも無視してその人物を見た。見てしまった。

力なく俯く血塗れの彼女は――

「……リイリス？」

フアントムに攫われていたリイリスだった。

そう認識したと同時にルーシィの頭は真っ白になり、身体中からは熱が引いていく。

よく見てみればジョゼの顔や服、床や壁の至るところに血痕が付着していることから、リイリスの受けた仕打ちがどれだけ凄惨なものだったかを物語っている。

決して長い時間一緒に過ごした仲ではないけれど、その短い時間の中でも不躰なくらいグイグイと距離を詰めてきて、でも今まで出会ってきたどの娘よりも生き生きしていて、それでいてナツ達と同じ温かいなにかを与えてくれた彼女に少なからず仲良くなれそうだと好感を抱いていたのだ。

奇しくもそれは、リイリスがルーシィに向けて抱いていた想いと同質のものだった。

「これ以上彼女が苦しむのを見たくはないでしょう？ 私としても心苦しいのですよ、何の抵抗もできない少女を痛めつけるのは」

「心苦しい、ですって……ッ、よくもそんな——!」

どう聞いても本心ではないジョゼの戯言にかつてない怒りが沸き起こる。こんな非道な事を行なっている時点でこの男は断罪されるべきだ。

だが今の拘束され鍵すらない星霊も呼べない自分ではなにも出来ない。

いいや——たとえ星霊を呼び寄せたとしても、この男には歯が立たない。

ジョゼのあまりに邪悪で暴力的な魔力が滲み出ているのを目にした率直な答え。

例えそうだとしてみこいっただけは許せないと、只々感情に任せ叫んでやる。

ふざけるな。

そう言つてやろうと目の前の外道に吠えようとした所で、彼女にとって最も触れてほしくない話題を持ち出された。

「あなたがご実家に戻られるのであれば、彼女を解放しましょう」

「ッ!! 嘘……まさか……」

「そう、あなたの父上からの依頼ですよ。娘を連れ戻して欲しいとね。ルーシィ・ハート  
フィリア様?」

一年もの間なんのアクションも見せなかつた父親の突然の帰宅命令。

こんなやり方で連れ戻そうとする父、ジュード・ハートフィリアに黙って従いたくないと憤りを覚える。自分はあの人の操り人形なんかじゃない。



しかし、そうした場合リイリスはどうなる？ 今以上に傷つけられ、下手したら死んでしまうかもしれない。

「さあ、家出など止めて大人しく家に帰りましょう、ルーシィ様」

明らかに作られた声、作られた台詞を吐くジヨゼに強い嫌悪感が生まれる。

ここでもし、拒否でもしたのなら、リイリスがどうなるか……。

自身の選択に人の、仲間の命がかかっている。そう理解したルーシィは躊躇いなく首を縦に振ろうとする。

「頷くなア!! 絶対、頷くんじゃ、ないぞ……デカパイ……」

「リイリス——!」

意識を失っていたかに見えるリイリスの叫びに、ルーシィは肩を跳ねさせた。

何度も言葉が途切れ辛そうな声を絞り出すリイリスに、安堵や心配の入り混じった声音を漏らしたルーシィが彼女に目を向ければ、身体中がボロボロでありながら強い意志の灯った瞳で、ルーシィに心配するなど気持ちを込めた視線を送っていた。

「アタシは大丈夫だ……変態ヒゲオヤジが、なんだってんだよ……うぐツッ」

「サンドバッグが喋るんじゃねエよ」

「やめて!!」

容赦なくリイリスの横腹を蹴りつけるジヨゼはそれだけでは済まさず、ジエイト幽兵を使つて

さらに彼女を傷つけていく。

暴力の音、痛みに呻く少女の声、鉄枷が激しく揺れる耳障りな音。

耳を塞ぎたくなる音が場を支配する。

目の前で起きている残酷な光景に非現実感に襲われながら恐怖に震えるルーシイは、仲間の傷つく所をこれ以上見たくない。そう覚悟を決めてジョゼの言う通りにするからと訴えた。

だが止まらない。

いくら叫んでも止まらない。

幽兵の暴力に晒されるリイリスから血が迸り牢を赤く彩っていく。

そこでルーシイは気づいた。ジョゼは彼女を痛めつけることしか眼中にないのだ。

なぜここまでリイリスに執着するのは分からない。けれど、このままでは彼女が死んでしまう。

それを唯一止める事ができるのは自分だけだ、自分がやらなければいけないんだ。

フェアリーテイル妖精の尻尾の仲間達を思い浮かべ、勇気をその身に宿し笑う膝を抑えつける。

リイリスを傷つけるのに夢中なジョゼはそれに気づかず闇に染まった笑顔を浮かべ、悦に浸っていた。

やるしかない、ルーシイはありつただけの力を込めて体当たりをした。

彼女の体を張った静止にジョゼの気が逸れ、魔法が解かれた。

——止まった。

「フッフツ、ルーシィ様は仲間思いのようで。

まあ、これでこの娘も少しは静かになるでしょう」

さつきまでの狂った様子から一転、邪魔された事に苛立ちを表すでもなく紳士然とした態度を見せる。

「それで、さつきの私の言う通りにすると言う発言に偽りはありませんね？」

やはりルーシィの声が聞こえていながら、暴力を続けていたのだ。

そのことに歯が軋むほどに食いしぼり、腹のそこから爆発しそうになる怒りを堪える

——ルーシィの怒りに呼応して微かにリイリスの呼吸が深くなる。

どうせ家に連れ戻されるなら、最後にとルーシィはこれまで抱いていた疑念を晴らす為、ジョゼに質問をする。

「二つだけ聞かせて。なんで私達のギルドを壊して、レヴィちゃん達に、リイリスをこんな目に合わせたのツ。パパにそうしろって言われたから？」

「なんで？ —— ついでですよ。つ、い、で」

「なツ!!？」

「きつかけはなんでも良かったんですよ。」

依頼達成の要であるあなたが、今回たまたまあのギルドにいて、たまたま私がそのギルドを潰したいと思つていた。それだけの話です」

なんだそれは。なんなのだその理由はッ。

そんな理由でこの騒動が引き起こされたのかッ。

事の始まりに自分が深く関わつていた事を知つた時以上にルーシイは驚かされた。

しかしそこでさらなる疑問が浮上する。

例の手紙の内容だ。たしかあれには彼女、リイリスを傷つけないこと、ギルド間の交流を行いたいと。そのような内容だったはず。

ならば自分で自分とリイリスは捕らわれ、彼女をこんなになるまで痛め付けたのか。

その事について言及すると予想だにしない答えを送つてきた。

「手紙？ ああ、彼女というのは——あなたのことですよルーシイ様。あなたと邂逅を果たすのに想いを巡らせていたばかりに少々、回りくどい内容となつてしまいました。それがあなたの望むところでもあるでしょう？ 身分を隠したがつていたようです」

それは騙す事を目的とした内容の書き方だった。

手紙にある彼女とはつまりルーシイで、捕らわれたリイリスを指すものではなかつた。

そしてギルド間での交流。これはそのままの意味だったが、自分のギルドの者達に伝えるのをうつかり忘れたという。

「いやア、まさか妖精フェアリーテイルの尻尾の方から戦争を仕掛けてくるとは驚きましたよ」

「どの口が言ってるのよ……!」

わざと妖精の尻尾に攻めさせるようにしたくせに、それを仲間にも伝えなかつたというのは何か裏があるのか。もしかするとこの男の場合、仲間達の事はどうでも良いと考えているかもしれない。

ルーシィの発言にさらに笑みを深めるジョゼは話は終わったと彼女の腕を掴みあげ無理やり立たせられたことで思考が中断された。

「お話は終わりです。行きますよルーシィ様」

「ち、ちよつと——ッ、え?」

まだリィリスを解放していないではないかと抗議しようと口を開くも、腕を引かれ鉄扉の前まで連れられ、ジョゼが扉を開け放った事で絶句した。

ないのだ。扉から先の道が。

下から吹き上げる風が髪を躍らせ体の内側から冷やされていく。

〃空の牢獄〃

出ることも入ることも困難なここは、目に写る景色からでも地上100メートルを超

える高さにある場所だったのだと理解した。

足がすくみそうになる彼女は、こんなところからどう移動するのか、誰がリイリスを連れ出すのか、先の見えない不安と恐怖が彼女の体を震わせる。

「……待て、よ……」

今にも消えありそうな掠れた声で呼び止めたのは、またしてもリイリスだった。

ジョゼによってあれだけ痛めつけた少女は、それこそ死んでもおかしくない状態だというのに、意識を失わずにいるのだ。

ここに来て初めてジョゼの顔に驚愕の色が浮かぶ。

「まだ……アタシはピンピン、してるぞ……来ないのか……? この、クサレ髭オヤジ」  
ジョゼは顔中の血管を浮き上がらせ瞳孔を開きリイリスに殺意の眼差しを向ける。

——本気だ。

本気で彼女を殺す気なのだ。

ルーシイを乱暴に突き放したジョゼは拳に魔力を籠め、ゆつくりと死を刻むようにリイリスへ歩みを進めていく。

「何か言い遣す」とは？」

鉄枷に繋がれたリイリスを見下ろし、聞いた者に底冷えさせる声で、今際の言葉を聞いてやるとせめてもの慈悲を見せる。

「そう、だな……今度からは——」

魔封石でも持つてくるんだな。

一瞬だけ、リイリスの魔力が高まったと同時に、魔力の伴った両腕で鉄枷を壊した。そして。

「ゴポオウウツ?!」

油断しきっていたジョゼは彼女の全力の右ストレートをもろにくらった——男の急所、股間に。

しかし幸か不幸か、彼の股間に命中する寸前でリイリスの魔力が切れ、ただの全力パンチ程度の威力で済んだ。それでも耐え難い痛みである事には変わりはないと奇声を発し悶えるジョゼ。

最後の力を振り絞つての抵抗だったのだろう、震える脚で立ち上がり、ふらふらと体を揺らしながら肩で息をするリイリスは傍目から見てもこれ以上激しく動くのは困難だろうと分かるほど。

「リイリスッ、大丈夫!？」

「はっ、はッ、これで……っ、大丈夫そうに、見えるなら……ハアッ、揉みたおす……!」  
軽口を叩いてはいるものの、どこからどう見ても重症を負っている彼女に心配の念は尽きない。

そんなルーシイの視線を振り切るように、リイリスは血で汚れた顔を腕で拭い向き合  
う。

「ハッ、ハア、ギルドを信じ、自分を信じる……それが、フェアリーテイルの魔導士……」  
今度は彼女がルーシイに向かって、おぼつかない足取りで近づいていく。殴られ切り  
つけられた少女の柔肌にはいくつもの傷が刻まれ、その痛々しさに、リイリスの受けた  
仕打ちにルーシイは嘆かずにはいられなかった。

しかし仲間を酷い目に遭わせた張本人が後ろで内股になりながら立ち上がるのを確  
認したルーシイは口に手を当てあわあわとリイリスの背後で憤怒の表情を浮かべる男  
へと指を指す。

「アンタが道を選んだ。誰に決められるでもない、アンタの道だ……！」

そんなルーシイの様子に構わずリイリスは、お互い触れあえる距離まで近づき震える  
彼女の肩に手を置き言葉を続ける。

「その先には必ず待つてくれている奴がいる——だから」  
でっかい声で呼んでやれ——ルーシイ。

穏やかな表情を見せた彼女は、立ち尽くしていたルーシイを突き飛ばした。



## 新たなる火種

“でつかい声で呼んでやれ、ルー・シー”

今まで変な呼び方しかしてこなかったのに、なんであのタイミングで初めて名前を呼んだのか。

それじゃまるで――

そこから先は考えてはダメだと、遠ざかる牢獄――塔の一番上にあつたのかと目にし、逆さで落ち続ける刹那の間に考えた最悪な可能性を切つて捨てる。

リリスも言っていたではないか。

仲間を信じろ、自分を信じろと。

今回の騒動のきつかけとなつてしまい、それに責任を感じていたルー・シーにとって、その言葉は重くなつていった心を軽くしてくれたのだ。

おそらく自分よりも先に目を覚まし、ジョゼからもルー・シーの正体や彼の目的も聞いたがゆえにそう伝えてくれたのだろう。

だから信じるのだ、あそこに残つた彼女を。

そして。

「ナツ——!!」

思い込みかもしれない、ここに来ていないかもしれない。でもたしかに、聞こえたのだ。

絶対——いるッ。

「ぬおああアアアッ!!」

地面に激突するぎりぎり、必死の形相で飛び込んできたナツがルーシイをキャッチ。全力疾走で来たナツの勢いは止まらず、ルーシイを抱き抱えたまま転げ続け、激しく壁にぶつかり止まった。

「ルーシイが降ってきたー!!」

まさか上からルーシイが落ちてくるとは思っていなかったと、ハッピーが驚きの声を上げる。

「メチャクチャだなオイ!!」

「やっぱり来てくれてた! ツ、お願いナツ!! リイリスが、リイリスがまだ上に残ってるの!!」

「なにッ!!?」

家に帰ることを決意させられたルーシイは、もう会えないと思っていた仲間とこうし

て再開できるなんて思っていなかったと内心で喜ぶのもつかの間、両手の縄を引き千切つてくれるナツに焦りを見せてまだリイリスが塔の最上階にある牢獄にいと、涙を滲ませて訴える。それを聞いてすぐにナツは塔を昇ろうとした、が――

『オオオアアアアアアア、ッ!!!』

直後、ここまで届く大音響が轟く。

それは、はるか上。まさにリイリスのいるであろう牢獄から響いていた。

これは怒り。とてつもなく強大な、例えるならそう。怒れる竜の雄叫びはこうなのだろうと、見たことのない竜ドラゴンをルーシイは見上げる先に幻視する。

「――っ、リイリスだッ!! ハッピー!!!」

「あい!!」

無条件に声の主がリイリスだと断言したナツは、あいつを頼んだと相棒ハッピーに呼び掛ける。それに応じたハッピーは猛スピードで飛翔。向かうは塔の最上階、リイリスの元へ。

どうかリイリスが無事であるように、そして彼女を助けてと遠ざかるハッピーに願いを託しルーシイは両手を組む。

「心配ねえよ。あいつは無事だ」

彼女の想いを感じ取ったのか、大丈夫だあいつは強い。そう真っ直ぐ笑うナツに彼

女は力なく頷くしかなかった。

リリスは重傷だ。それも魔力がほとんどない状態で。

立っているのもやっとだった彼女はそれでも仲間を優先しナツの元へ送り出してくれたのだ。怒り狂うファントムのマスターの脅威に曝される中で。どれだけの覚悟で自分を逃してくれたのか、それを思うだけでも胸が苦しい。

両手を強く握り合いひたすら祈る。

「ナツうー!! ルーシィーッ!!」

願いが通じたのか、ハッピーが誰かを抱えて急いだ様子で降下してきた。

二人に明るい空気が流れる。

しかしハッピーが連れてきた彼女の姿を見た瞬間時間が止まった。

血だらけでボロボロな少女の体は無事なところを探すほうが困難で、浅く小さな呼吸で辛そうにする彼女に放心していたナツが叫ぶ。

「魔力が——ッ、おい! しつかりしろ!! 何があつたんだッ!!」

「オイラが行った時はリリスともう一人知らない奴が倒れてたんだ。たぶんそいつがリリスを……ッ」

ファントムでのマカロフのように、彼女から魔力が感じられない。ましてやこんな大怪我、いつ生き絶えてもおかしくない状態にナツは焦りを見せる。

ナツ達がここに向かっていている中、リイリスの魔力が一瞬大きく高まった後すぐに消えてしまったのを感じ取っていたナツは、直前の魔力の位置を頼りに塔まで迷わず来たからこそ分かる。あれが彼女のなけなしの魔力による救援要請だったのだと。

多くの血と魔力を失った少女の体は冷たく、体は小さく震え、血糊の付いている肌は死人のように青白い。

重く閉ざされた目蓋の奥にはいつもの快活な瞳が隠され、より幼くさらに痛ましさが増している。

誰がこんなことをしやがったッ。

ナツはこれ以上増すことのないと思っていた怒りが、凄まじい速さで膨れ上がるのを感じていた。

「……フアントムのマスター」

「ルーシイ、今なんて言った……ッ」

「あいつが……ジョゼってやつが、リイリスを……!」

先程の事を思い出してしまったルーシイは、口をつぐみ恐怖と憤りで震える体を自分で抱くように抑える。

この果てしない怒りの矛先をどこに向ければいいかを、残り少ない理性で探していたナツにとって、ルーシイの呟きは飢えた獣に餌をチラつかせるのと同義。

再び、今度は明確な敵意を抱いて塔を登ろうとリイリスから離れようとしたナツは、なにかに腕を触れられている感覚を覚える。注意しなければ感じられない弱々しい力に気づけたのは、すぐ近くににいる仲間によつてのものだったからなのか。

「リイリス……?」

意識が戻つたのかと憤怒の表情をほんの少しだけ和らげ、自分の腕を掴む彼女に目を向ける。

しかしリイリスは気絶したまま。

それでもナツの腕を弱々しい力で握り、まるで行つてはいけないと伝えたいかのように放さなかった。

「ナツ、ギルドに戻ろう!」

「けどリイリスの仇を取らなきゃいけないぞ!!」

たとえ誰に止められようと止まらない、我慢ならないと怒りを吐露するナツをハツピーが負けじと止めようと現実を突きつける。

「ナツじゃ無理だよ!!」

「やってみなきゃ分かんねえだろ!」

「早くリイリスを手当てしないと!」

「うぐつ……そ、それでもオレは行くぞ!!」

平行線を辿る二人の言い合いの中で出てくるギルドの仲間達の負傷、マスターが重体という話に、リイリスを助け出せたことに安心していったルーシイの心に申し訳なきが襲う。

自分のせいでこんなことになっているんだ。

たしかに、少なからず今回の一件にルーシイが関係していることは事実、そして何よりもその事が彼女の心を締め付ける。

「ごめんね……全部、あたしのせいなんだ……」

今にでも泣き出してしまいそうな声でギルドの、仲間の傷みを引き起こしたのは自分なのだと告げる。

自分があの冷たい家に戻れば解決するのだろうか、そうすればギルドのみんなはこれ以上傷つくことはないのだろうか。

そうならばどれだけいいか。

既に大きな被害と争いが巻き起こり、両ギルドとももう止まれないところまで来てしまっている。もしかすると大事なギルドそのものを潰されてしまうかもしれない。だったら今からでもジョゼの元に行って家に戻ればいい。

でも――

「それでもあたし、ギルドにいたい……!」

フエアリーテイル  
妖精の尻尾が大好きツ。

「お、オイどうしたツ！ なんの事だ!？」

「ルーシイ、何か嫌な事があつたの？ ギルドに好きなだけいれればいいよー!」

溢れだした感情が涙となって溢れる一人の少女に、ナツとハッピーはたじろぐ。もはや言葉を紡ぐこともできない程にルーシイの嗚咽が止まらない。

唯一本人の他にこの事を知っているリイリスは意識のない中、ナツの腕をほんの少しだけ強く握るだけだった。

ルーシイの涙に毒気を抜かれたナツが少しだけ冷静になったことで急ぎ、ギルドに帰ることにしたのだが、やはり心配なのはリイリスだった。

道中何度も苦しそうに声を漏らし、痛みに顔を歪める彼女をただ見ている事しかできない自分達に無力感に苛まれ、せめて回復魔法が使えたならと思わずにはいられなかった。

さらに悪いことは続き、途中でルーシイから鍵がないとの衝撃発言。

その中には彼女の所有する黄道十二門の鍵も含まれていた。世界でも非常に希少であるその鍵を五本も所持しているの鍵の紛失に、ただでさえ重苦しい空気が物理的に重



く感じる、精神的にも身体的にも辛い時間だった。

それからファントムからの追っ手もなく無事、ギルドに到着した。

地下の仮酒場ではみんな、これからファントムに仕掛けに行こうと様々な案を出している最中だったが、ナツ達が帰ってきたのに気づき、ナツにおぶさるリイリスを見ると驚愕や歓声の声を上げる。

「ナツ！ お前今までどこに、って！ リイリスう?！」

「なに?!? まさか連れ戻してきのか!」

「みんなアー!! リイリスが戻ったぞおおッ!!」

「でもちよつと待て、なんか怪我してねえか……?」

しかし彼女の様子を正しく認識した事で喜びの声はどよめきが変わった。

とても少女が受けていいものではない暴力の跡、どこもかしこも血に汚れた痛々しい傷だらけのリイリスに、ギルドの者達の心の内にファントムの影がチラつく。

ウチの仲間こんな仕打ちをしてタダで済ませるものかと彼らの憎悪と憤怒が燃える。

ナツもそんなこと説明するまでもないと黙ってリイリスをミラとカナ、そして簡易ベッドに眠るレビイのいる奥の部屋へ運び込んだ。静かな場所で安静にさせようという考えなのだろう。

当然、重傷の彼女を見た二人は驚き、怒りに震えた。何も言わず戻ろうとするナツにミラが問いかける。

「ナツ、何処へ行くの？ 誰よりもあなたが彼女の近くにいてあげなきゃいけないでしょ」

「ミラ——オレはこれ以上怒りを抑えるなんてできねエツ……！そんなオレがコイツの近くに居たら、毒にしかならねえだろうがッ！」

歯を軋ませ煮えたぎらせるナツの怒りの形相にミラだけでなくカナすらも息をのむ。こんなナツは初めてだ。

そして彼は、もう一人の少女の崩れ行く心を救うために漏れ出す怒りの闘志を抑え込んで歩みを進めるのだった。

振り返らず消えていくナツに二人は何も言えず見送る事しかできなかった。

「みんな悔しい思いしてるつてのに、ミストガンにラクサス達は何やってんだよッ」  
居場所を特定しようとかカードで占うも何の結果も出ないミストガン。

通信用魔水晶ラックリマに反応も返さないラクサス。彼に至っては、何度も今回の騒動の事が通信で伝わっている筈なのに、何の連絡も来ないまま。

どちらも妖精フエアリーテイルの尻尾最強の一角であるS級魔導士。彼らは今どこで何をしているのだと憤りを見せるカナに、ミラも彼らの帰還を願わずにはいられなかった。

その後、ルーシイによる告白——フアントムの狙いは財閥令嬢である自分の身柄の確保であること、それが彼女の父親からの依頼によって起きてしまったこと。この騒動はフアントムが故意的に起こしたこと。牢でのリイリスへの残酷な仕打ち。

ジョゼの明かした目的を明瞭にする一方、牢屋で見た光景。それをそのまま伝えるにはあまりにも危険だと、爆発寸前の時限爆弾に火を放つに等しいと理解しているからこそ、そこだけは曖昧に伝えた。

爆発しそうになる怒気を胸に押し込む一方、ルーシイがお嬢様だったことにはほとんどの者が驚きを露わにした。それだけ彼女がこのギルドに馴染んでいた証拠でもある。

かたや、フアントムの目的が彼女だと知った事で、俄然戦意を滾らせる彼らを目にしたルーシイは自分のためにここまで親身になってくれる事に目頭が熱くなる。

自分が原因とも言えるのに、それを責められる所か立ち向かってくれると言う嬉しさと、そんな素晴らしい人達がさらに傷付き、リイリスのように大怪我をしてしまうかもしれないと言う怖さの背反する思いに揺さぶられ、実家に帰るんだと固めかけていた決意が揺らぐ。

「あたし……どうすれば」

もつとみんなと一緒にいたい。もつと色々な思い出を作つて冒険したい。けれどそ

れには多くの人が危険に晒される。

あたしは、あたしは——

「親に邪魔されようがフアントムに攻められようが、決めんのはルーシイだ」  
彼女の本心にナツの声だけがクリアに届く。

決めるのはあたし——

「お嬢様とか金持ちとか、そんなの関係なくこのポロ酒場で騒いで楽しそうにしてんのがルーシイだ」

立場とか関係なく、あたしらしくするのがあたし——

「お前の居場所フエアリーテイルはここじゃねーの？」

だって、妖精の尻尾のルーシイなんだろう？」

あたしの居場所は、ここ——

そうか、あたしここにいってもいいんだ。

フエアリーテイルのルーシイでいていいんだッ。

自分が本当にギルドの一員なのか疑っていたのは、他ならぬ自分だったのだ。

はじめからフエアリーテイルこは自分を一人の人間として受け入れてくれていたのだ。

ナツの不器用な激励が心に染みていき、冷え切っていたルーシイの心と体を温め胸いっぱい嬉しさによる涙が溢れる。

「泣くなよ、らしくねえ」

「そ、そうだ。漢は涙に弱い!!」

「だ、だつてえ……ッ」

グレイとエルフマンの言葉に、涙声で何も言い返せないルーシイはみんなから送られる陽の光のような優しい視線に、次から次へと涙が溢れ止まらなくなってしまった。

彼女はもう大丈夫だ。

そう感じ取ったナツは地上に続く階段を昇っていき、内で暴れる様々な感情を解き放つ。

『うおおおおオオオオッ!!』

ナツの雄叫びは地下にまで響き渡り、全員の鼓膜にその声を刻む。

それは単に気持ちの発散だけでなく、本当の仲間として産声を上げたルーシイを喜ぶ為に発したものだっただけかもしれない。

「つたく、あのバカ。眠ってる二人を起こすつもりかっての」

酒を片手に文句を呟くカナだったが、どこことなく嬉しそうな表情をしている。

応急処置を受けたリイリスの顔色は幾分か良くなっているが、依然として魔力は回復せず、熱も出始めていることから状態は芳しくない。

一方これまで眠っていたレビイだったが、ナツの叫ぶ声により意識が戻ったよう  
でゆつくりと目蓋を開いた。

「レビイは……」

「レビイ？ 目が覚めたのね」

「私、寝ちゃつてたんだ……ッ、リイリスは!!？」

目を覚ましたばかりで上手く働かなかった思考が、現在の状況を把握する為に覚醒したことで、心配し続ける彼女の名を呼び飛び起きた。

そして近くに包帯で手当された傷だらけのリイリスが横になつているのを目にしたレビイは酷く取り乱し、何があつたのかと矢継ぎ早に質問する彼女の勢いに押され気味のカナはこれまでの経緯を語る。

最初こそまったく把握できない現状に戸惑いを見せていたが、リイリスがマカロフと同じ状態にあると知る否や、自分がポーリュシカの所へ連れていくと言いだしたのだ。

どちらにせよ、ここでは満足に治療も出来ないと言われないと元々ポーリュシカの元に連れていく予定だったのだが、手の空いている者が限られている中で誰が連れ出すか決めあぐねていた所にレビイの申し出に願ったり叶ったりだと話が纏まる。

「念のためもう一人付いていった方がいいと思うの。途中なにかあるか分からないし……」

「なら私がいくよ。すぐに帰るようにするからさ」

「カナ、ありがとう！　ちよつと待つてて、すぐ支度するから！」

ミラの助言を受け、それならばとカナも加わる事となった。

一刻も早くリイリスを助けたいレビイはすぐに向かおうと、最低限の準備だけ終え彼女を背負おうとした時、さつきまでなんの反応もなかった通信用魔水晶の通知音が鳴り出した。

それはマカロフ不在であるこの事態における福音となるか。

水晶に映し出されたのは、この状況を覆せるであろう人物。

「ラクサス！」

「あんだ、今どこにいるの!!　こつちは大変なことになってんのよ！　早く戻つてきてッ!!」

『あア？　はッ、呼び出されたからなんだと思えば。』

じじいが始めた戦争になんでオレたちが参加しなきゃなんねえんだ？」

ミラとカナの呼び掛けに不遜な態度で要請を突き返すラクサスに、それでも仲間が狙われているとミラが伝えた。しかし——

『ルーシイ？　誰だそいつ。あア、あの乳のだけエ新人か。オレの女になるなら助けてやつてもいいと伝えとけ。それとぶつ倒れてるじじいにはこう伝える』

——とつと引退してオレにマスターの座をよこせとな。

「あんたつて人はッ」

あまりに自分本位な要求に、カナはこの男は本当に自分達のギルドの一員なのかと険しい眼差しをラクサスへ向ける。

たしかに、順当に行けばマカロフの孫である彼が次期ギルドマスターになる可能性が高い。しかし、ラクサスはここのギルドマスターになる為に必要とされる資質が備わっていない。

人を想いやり向き合い、家族同然に接するという気持ちに欠如しているのだ。

昔はそんなんじゃないやなかったのに、一体いつからそうなってしまったのか。あなたはそんな酷い事を言う人なんかじゃなく、本当は誰よりも仲間を想うことができるはずなのに。

自分がいくらそう伝えても、今のラクサスには届かない。悔しさと無力感に苛まれるミラの瞳に涙が浮かぶ。

『そもそもオレでなくても、そっちにはリイリスがいんだろうが。あいつはどうしたよ』  
そう。ラクサスは前からリイリスの事を高く買っている。

それには「怒りの日」が関係していることはみんなが分かっていることなのだが、それを含めてどうしても自身を最強と謳う彼が、あの日から彼女に拘るのか不思議でなら



なかった。

「リイリスもやられたの……」

レビイの沈痛な眩きがやけに響いたのは、誰も言葉を発せなかったからであり、つまりラクサスも含めてこの空気に吞まれているということ。

『オイ、そりや何の冗談だ……あいつがやられただア……ッ?』

「そうだよ、フアントムにやられたのさ! あんたが気に掛けてたリイリスがこんなに酷い目に合わされたんだよ!」

水晶越しから映された彼女の姿に目を見開いたラクサスは、ゆつくりと俯いていき肩を戦慄かせ始める。

直後、向こう側の水晶から送られる特大の破裂音。

その音に三人は反射的に耳を塞ぎ目をつむった。恐る恐る目を開け見返すと、そこには何も映し出されていない沈黙を宿した水晶があるのみ。それだけが、相手側が一方的に通信を切ったという事実を雄弁に語っていた。

彼の取った行動は果たしてこの波乱に参加するものだったのか、或いは――

吹き出す煙に包まれる小型通信用魔水晶ラックリマを無骨な手が握り潰す。

「お、おいッ、ラクサス……!」

雷神衆の一人であるフリードの呼びかけに答えるでもないラクサスは肩をぶるぶると震わせ、彼から発せられる雷の孕んだ魔力が辺りにまき散らされる。

「もうあのギルドはお終いだ……」

唯一、自身の認めていた少女が敗れた。

誰よりも凄烈で強大な力を過去に見せた彼女は、今の腑抜けきつたギルドに染まり本当の力すら出せなくなった。その事がなによりも、ギルドを壊された事よりもラクサスの心を荒立てる。

あいつだけは――

あいつだけは違うと思っていたのにッ。

あの時に見せた純粹な力、それが目覚めるのをラクサスは今日という日まで待ち続けた。

しかし今回の戦争を経て、リイリスは目覚めるどころかあんな無様を晒すまでに弱く堕ちた。

変えなければならぬ。

「オレが……」

――このオレが創り変えてやる。

それはこれより先に始まる新たなる波乱の幕開けでもあった。

## 想いを喰らって

「まさか一日の内に、矢継ぎ早で二人も同じ症状の病人を見る事になるなんてね」  
「彼女は、リイリスはどうなるんですか……？」

ポーリユシカの住む木の家には三人の少女が訪れていた。

リイリスを連れてきたレヴィイとカナを見て「またか」とため息と共に呟きはしたものの、その後のリイリスへの治療は見事なもので、終わる頃には彼女の顔色も少しだけ良くなり熱も下がっていた。

人間に憎まれ口を叩きはするポーリユシカだが、治癒魔導士としての腕前は一流だ。

そしてリイリスの容態を聞くレヴィイにポーリユシカはふんつ、と鼻息を一つ鳴らし事務的に説明を行う。

これは枯渴<sup>ドレイン</sup>によって引き起こされたもの。

流出した魔力は保有者の元には戻らず、空中を漂いやがて消える恐ろしい魔法を受けていたと言う。しかもリイリスの場合、それもやつと回復してきていた所での無理な魔法の行使でさらに症状が悪化しているとのこと。それでもこのまま安静にしていれば

二日程で状態は回復する見込みだ。

「正直、こんな状態でここまで強力な魔法で傷つけられて生きているなんて奇跡としか言えないね」

「リイリス……」

「あのバカ、無茶なんかして……」

マカロフとは別室のベッドで寝かされているリイリスの容態を包み隠さず明かされた事で、どれだけ彼女が危険な状態にいるのか改めて知らされたカナとレビイはどうか彼女が回復し、いつものようにギルドを明るくしてくれるよう願うばかりだった。

「とつとと出ていきな。辛気臭いわ、人間くさいわで我慢ならないよ！ ただでさえさつきも出入りしてたつてのにッ」

「つたく、少しはマスターの顔も見せてくれたつての。ま、早いとこ戻らなきゃだし……レビイ？」

ポーリユシカの人間嫌いにも困つたものだと思痴をこぼしながらも、それでもギルドが心配だと帰路に就こうと、扉に手を添え開けようとしたカナだったが、いつまでも付いてこないレビイを不思議に思い振り向いた。

「ごめんカナ。私、ここに残るから先に行つてて」

「レビイ、あんた……」

カナと相對する、扉——リイリスの眠る部屋に続く扉の前で向き合うレビイの瞳からは、絶対ここから離れないと感じさせる意志が宿っていた。当然と言うべきか、真つ先に彼女の行いに異論を唱えたのはポーリュシカだ。

「冗談じゃないよ!! 一人でも手が掛かるつてのに、さらにもう一人も見なきやならぬ所に、患者よりも辛そうにするあんたがいたんじや、却つて迷惑さ!!」

「じゃあ外にいます! でも、リイリスが目覚めたら知らせて下さい。たぶん起きたらすぐに戦いに行つちやうから……」

「——私からも頼むよ。レビイの言う通り、あいつ怪我や病氣關係なく突つ走ると思ふからさ」

二人から聞かされるリイリスという少女の無鉄砲な氣質に呆れて果てるポーリュシカは、せつかく面倒見た相手をみすみす見殺しにもできないと、仕方なく了承した。

「待つならあの娘の傍にいな、その暗い顔を止めてね。ただし大声出したりうるさくしない事。こつちにもやる事があるんだからね」

そう付け加えた彼女はもう言うことはないと自分の作業に掛かり始める。

——まったく、最近の人間はどいつもこいつも身勝手なんだから。

こつちも簡単に頷いてくれるとは思つてもみなかつたと、しばらく呆氣にとられるレビイとカナに『あんたはどつとどつと帰りな! そつちは早く見に行つてやつたらどうだい

！』とお叱りを受け、それぞれ自分の向かうべき所へ足を向けるのだった。

まさか患者以外に人を家に入れるなど考えもしなかったポーリユシカは、リイリスの傍にいと強い姿勢を見せたレビイに感心すらしていた。

普通なら追い出すところだが、あんな目で見られてしまえばこちらが折れるしかない。

近い内に化けるかもね、あの娘<sup>レビイ</sup>。

それとは別に、あの娘——リイリスからは他の者と違うなにかを感じる。

それがなんなのかは分からないが、それによつて今後よからぬ事が起こらなければいいのだがと、ポーリユシカは一抹の不安を抱いていた。

レビイ達がポーリユシカを説得し終えてから一時間ほど経つた現在、妖精<sup>フェアリーテイル</sup>の尻尾は騒然としていた。

ギルドの裏手にある広大な湖の向こうから、幽鬼<sup>ファントムロード</sup>の支配者が本部ごと攻め込んできたのだ。

巨城まるごとが巨大な機械仕掛けの六本の足で迫りくる光景に口を大きく開けて唾然とする者や、腰を抜かす者までいる中においても、六足歩行で近づいてくるファント

ムのギルドは止まらず、周囲を威圧するかのようにならしく轟く巨大な足音は、妖精の尻尾の前でギルドごと湖に据わる事でようやく鳴り止んだ。

堂々たるその佇まいに皆が息を飲む。

なにを仕掛けてくるんだ。

誰もが不安に思うなか、機械的な音を立てて現れた巨大な砲塔。

そこに凄まじい魔力が収束されていき砲身そのものが光を放つ。

魔導収束砲 “ジユピター”

明らかな破壊を目的とした姿勢を見せる敵ギルド。

人対破壊兵器——抗いようがない目の前の現実には打ちのめされそうになるギルドの者達の中でただ一人、これに立ち向かおうと言う人物がいた。

「全員ふせろオオオツ!!!」

「エルザ!」

「おい! どうする気だよ!!」

真つ先に駆け出したエルザは一番先頭に立ち、換装——“金剛の鎧”を纏う。

超防御を誇るこれに換装すると言う事はつまり。

「受け止めようってのか!」

たった一人の人間が超破壊兵器の一撃を防ぐなど不可能だ。



それでもギルドを、仲間を守るのだと不可能を可能にしようという想いの力がエルザから溢れ出す。

護りきる——たとえこの身が減じようと。

エルザの死に行くに等しい行動にナツが叫び、彼女の元に向かおうとするのを止めるグレイは、今はエルザにかけるしかないと必死で説得を続ける。

そして、射線上の全てを破壊する魔砲が無慈悲に放たれた。

「ぐっ——お、おとおオオッ!!!」

破壊の力と守護の力、両者が鬨ぎ合い拮抗する。

たった一人による防衛戦は苛烈を極め、ジュピターの前にエルザの体にダメージが蓄積されていく。

それすら顧みない彼女の奮闘により、魔導砲の力を次第に散らしていく。その代償としてエルザの鎧は罅割れ砕け始め、魔力は全てを使い潰す勢いで消耗し続ける。

早く終わってくれ。

誰もがそう思う中、ついに魔砲の光が弱まっていき力を失くし始めた。だが、魔導砲が終えるか否かという所で鎧が砕け散り、エルザは吹き飛ばされた。

いくら妖精の尻尾最強の女魔導士と言えど、破壊兵器を前に敵わなかったのか——いや、彼女は護りきった。

ジュピターがギルドに直撃するギリギリの所で、彼女の力が打ち消したのだ。

身を挺した護りでギルドや仲間たちを助け、さらに彼女自身も生きているという奇跡に周りの者は驚くばかり。

だが――

『マカロフ。そしてエルザも戦闘不能』

拡声器を通じて淡々と事実を突きつけるのは、ファントムロードの幽鬼の支配者――マスタージョゼ。彼の言葉が妖精の尻尾の心を揺るがす。

『もう貴様等に凱歌はあがらねえ――あのクソガキ、リイリスを今すぐ渡せ』

怨嗟の籠った声音で続きを口にするジョゼにギルドメンバーの多くが彼の真意に気づく。

これは報復だ。

ファントムの名を貶したリイリスに対する死刑宣告。幸いにも彼女はポーリユシカの元にいる。最悪、相手がその事に気づくにしても猶予がある。

それでなくても、たとえ居場所を教えろと脅されようが、妖精の尻尾の為に誰よりも早くファントムに復讐をしてくれていた仲間家族を差し出すことなどはするはずもない。

「仲間を敵に渡すギルドがどこにあるってんだ!!」

「リイリスをこれ以上傷つけさせるかよッ!!」

「確かにあいつ、悪ガキではあるけど!」

「ギルドでよくケンカしたり問題も起こしたりなんかもしてるけどツ!!」

——それでも家族なんだ。

「家族……」

自分の知る家族とは違う、それでいて何よりも固い絆で結ばれたギルドに圧巻していたルーシイの隣にグレイが立つ。

「お前もオレ等家族の一人だろ。なら、何をすべきで何を言いてえか分かんדרろ?」

そうだ。今までファントムに対して感じてきたものはなんだ——怒りだ。

ギルドを壊されレヴィ達を傷つけられ、マカロフやリリスを死の淵に立たせた。仲間家族をそんな目に合わされれば何をすべきか。

「仲間を売るくらいなら死んだ方がマシだツ!!」

「オレたちの答えは決まってるんだよ!! おまえ等をぶつ潰すってな!!」

ルーシイだけでなく、ギルドそのものの心を代弁するエルザとナツの怒りに咆哮により身体の奥底から力が湧いてくる。

今こそ立ち上がる時。

お嬢様でもただの少女としてでなく、一人の家族として。

——あたしも戦うんだツ。

他でも無い、妖精の尻尾フェアリーテイルの魔導士として奮起したルーシイは自分に出来ること——星の鍵を探し出す事を決意し、善は急げと行動に移すのだった。

『ならばさらに特大のジユピターをくらわせてやる!! 人生最後の15分間、後悔と恐怖の中で苦しみもがけエエツ!!』

ジユピター第二波まで残り15分、ジョゼの魔法で作り出された幽兵シエイ兵が送り込まれると共に、最後の戦いへのカウントダウンが刻まれようとしていた。

ずっと後悔していた。

もしかしたら、あの場を切り抜けられる方法があったんじゃないか、あの時リリスから離れず近くでサポートをしていたら彼女がここまで酷い目にあう事も無かつたんじゃないか。

そんな、たればの可能性を考えても彼女は元気になってくれない。ポーリュシカの言っていた辛気臭い顔になってはいけない、それこそ不貞腐れている場合でもないと強めにほっぺを張る。

ぺちんッ! と小気味よい音を奏でさせた両頬はじんじんとした痛みをしつかり感じながら、レビイは迷いの無くなった瞳でまっすぐ、確固たる目標を見据えていた。

——私は強くなる。

「すぐには無理だと思うけど、絶対いつかリイリスを守れるくらい強くなるからね」

自分の手よりも少しだけ小さな彼女の手を両手で握り誓う。いつの日か隣に並び立ち、胸を張って自分は強くなったのだと言えるように。

だから無茶だけはしないで。

「……それじゃあ、アタシはそれくらい強くなったアンタを守れるくらい強くならなきゃだね」

「——ッ!! リイリス!」

『おはよ』と軽い調子で挨拶するリイリスにレビイは驚きの声を上げる。まさかこんなにも早く目を覚ましてしまうなんてッ、せめて半日でもそのまま休んでくれていたら良かったのに——。

まさに今、ファントムに攻め込まれているギルドの事を知らないレビイは、早過ぎるリイリスの目覚めに嘆いた。

「いてて、あんの髭オヤジ。さんざん痛めつけやがって……しかもアタシの誇りまで……10倍返ししてやる」

「ま、待つて! 安静にしてなきゃダメだつて!!」

身体中が痛みに悲鳴をあげるのも構わず、ベッドから体を起こすリイリスに、慌てて

待ったをかけるレビィ。

いくらポーリユシカの治療により危機を脱したとは言え、未だ重傷の身。それに加えて魔力も枯渇している状態で無理に体を動かすなど、何を考えているのだと叱りたくなるのを抑えて語りかける。

「アナタはさつきまで死んでもおかしく無い状態だったんだよ？ 本当なら何日も休んでいないといけないの。なのに、なんでもう戦いに行こうとするのッ」

——そんな身体で戦いに行つては、今度こそ死んでしまう。

「声がさ、聞こえたんだ」

「声………？」

「みんなの、仲間家族が怒ってくれている声が届いたんだよ。だったら早く行かなきゃだろ

？」

そして今この時もフロントムとの戦いが繰り広げられているとリィリスが言う。

その事に驚愕するレビィは悔しそうに目を伏せていき、何かを堪えるように沈黙する。繋がっているからこそ分かる、小さく震えるレビィの手。そこからすぐに仲間の元へ駆けつけたいという想いがリィリスに伝わる。

しかし——

「だったら尚更ここにいないといけないでしょ。そんな身体で行つても死に行くよう

なものだよ」

みすみす死に行く家族を見殺しに出来るわけがない。たとえば、こうしている時も傷つき倒れる仲間がいようと。

絶対に離さないとレビイはリイリスの手を強く握り締めここに留まるよる瞳で訴える。

「……止めるなよ、離せって」

「アナタだつたら止めないの？」

リイリスは語気を強めてレビイの想いを拒絶するも、負けじと言い返してくる。もし同じ場面で相手が大怪我を負ったまま送り出すのかと。

「そんなわけ——」

「もしかして、自分だから大丈夫。自分だけならいくら傷ついてもいい。なんて考えてない？」

リイリスから息を飲む心配がした。

こんな予感、当たっていて欲しく無かったと悲しげにレビイの目が細まる。

何年か昔、ギルドに入ったばかりの時のリイリスは荒れに荒れていて、所構わず怒りを吐き散らし、親しくしようとした者すら激しく拒絶し、誰も手に負えなかったのだ。その中で拒絶された者の一人にレビイも含まれていた。

だが、暴れる内に壊してしまった備品を弁償したり、迷惑をかけた者達に詫びの品を差し出す等して反省の姿勢も見せていた。その背景には一人で危険な依頼に向かい資金を稼いでいたという事実がある。

例え怪我をしようとは何があるうとも、そんな日々を繰り返すリイリスをマカロフが止めようとしてはそれを拒み、チームを組もう言ってきた者達すら彼女は拒んだ。

あの日までは――

「……アタシには怒る以外に何もなかった。たぐさん迷惑かけたし、今もかけてる。

でも、大切なものも、自分のことも分からなかった何者でも無いアタシをみんなは家族として迎えてくれた」

――だったらそれに応えるのが家族の務めだろ。

今度はリイリスが強い意志を灯した瞳でレヴィイを見つめ返した。

それを受けたレヴィイは確信する。彼女はいくら止められようとも絶対、そこそ命を落としかねない戦いにだって行くだろう、と。

「どうしても行くって言うなら、私も付いていく」

だから今度は置いていったりしない。もう一人になんてしない。

「なんでたいして仲良くもないアタシにそこまでしてくれるわけ」

「……約束、守ってくれたでしょ？ あの夜、鉄竜くろがねのガジルから助けてくれた」



「約束……?」

もう覚えていないかと、レビイは少し寂しい気持ちで思い返すのは昔にリイリスが自身に伝えてくれた言葉。

——もうアンタを傷つけないようにするし、アンタが危なくなったらまつさきに助けに行く。

当時、多くの問題を起こしてばかりだったリイリスにとって、誰にどんな詫びをしたのか、どのような反省の意を見せたかほとんど覚えていないだろう。それでもこうしてレビイは覚えている。昔からの繋がりにある。

それだけは理解したリイリスは、レビイの口にした内容をもう一度頭の中で復唱し、小さく笑みを浮かべた。

「ふふ、それじゃあ今度アタシがピンチになった時はレビイが助けに来てくれる?」  
「つ、うん! でも無茶だけはしないでね!」

今まで見せてきたリイリスの顔とは違う、儂げで少女らしい微笑みを見せて、まつすぐ自分を頼ってきてくれた事が何よりもレビイの心を躍らせる。

リイリスの見せた違う一面、それは弱っている状態からくる彼女の本当の顔だったのか、それが少しだけ気になるレビイは、これから彼女の事を知っていけばいいと明日を見据えていた。

少女達の想いが重なった事で、不安に包まれていた空気が晴れた。

それを感じ取ったのか、扉を開けてポリーリユシカが姿を見せる。

「どいつもこいつも、あんたらは頑固な奴が多いみたいだね」  
フェアリーテイル

「あ、ツンデレさん。怪我治してくれてありがとう」

「誰がツンデレだい!! 初対面でよくそんなこと言えるね!!」

「すいません……それがリイリスですから」

ポリーリユシカがどんな人物なのかを人伝に聞いていたリイリスが、彼女に対して抱いた人物像は——ツンデレ。

これしかないと、もし彼女と会った時はそう呼ぼうと決めていたほど。そんなリイリスに、どこぞの青い猫みたいな事を言うレビイ。

「まったく、どうなってるんだい。あいつといい、あんたといい、いきなり魔力が回復するなんて」

「え? —— ツ、ほんとだっ!」

言われてはじめて気づいた。一体いつからなのか、レビイはリイリスから確かな魔力を感じた。

「みんなからたくさん貰ったから——とところでレビイ、いつまで手繋いでるの? ずっと? まさか一生一緒だよ、みたいな?」

何を言っているんだと、キョトンとするレビイはリイリスの手に視線を向けると——  
さつきから繋がりに続けている二人の手。

「へ？ あ、ご、ごめん！」

それに気づくとレビイは慌てて放した。

すっかり忘れていたようで、彼女の頬は気恥ずかしさでほんのり赤く染まっている。

リイリスは握られていた——包帯が綺麗に巻かれた右手を見つめ、何かに思いを馳せるように瞳と共に手を閉じた。

これならいける。

みんなの想いを右手に乗せて、まだ微かに家族レビイの温もりを感じ決意する。

今度は絶対負けない。そして、この力にも——決着をつけるんだ、この手で。

「どうやら前に進めそうじゃな。リイリス」

「——ッ!? あなたはッ」

「うん、もう逃げない。みんながいるから」

勝負の時は近い。

## 竜の目覚め

15分を要するジュピターの再充填は直前にナツによって阻止され、さらに彼によりエレメント4の内一人が撃破された。

次に用意したギルドまるごとを機械仕掛けの巨人とした「煉獄砕破」の発動。それの原動力であるエレメント4の一人、ムツシュ・ソル。彼に呼び起こされたトラウマに苦しめられたエルフマンが機械巨人の手に捕らわれた姉の涙を目にし、これまで禁じてきた全身接収「獣王の魂」を発動。その圧倒的な力でムツシュ・ソルを撃破。

三人目のエレメント4「大海のジュビア」との戦いに臨んだグレイであったが、なんやかんやあつてジュビアが彼に惚れ、勝手に失恋し、また惚れ直して決着を見せた。そして最後の一人「大空のアリア」を撃破したのは、驚くことにエルザだった。彼女はジュピターを受けた身でありながら、エレメント4最強の男を一撃で打ち倒したのだ。

本来なら、ダメージの残る状態で易々と勝てる相手ではないだろう。

ならばなぜ？ それは、彼女に実力以上の力を発揮させることとなったアリアのとあ

る失言によるもの。

『悲しい。マカロフやあの少女だけではなく、かの妖精女王テイターニアまで地に落とす事になろうとは』

『あの少女？』

『リイリスという娘むすめの魔力は凄まじいものだった。それ故に枯渇で苦しむ姿は——嗚呼つ、悲しい!!』

そうか、こいつがリイリスを追い詰めた一人——マスターだけでなくリイリスにまで手を掛けていたのかッ。

エルザにとってその事実だけが心の奥深くまで浸み込んでいき、まだ何かを言っているアリアの声に耳を貸さずに勝負を付けに行く。

換装——“煉獄の鎧”がその身を包む。

彼女の持つ鎧で最強の鎧。禍々しいフォルムで黒に覆われるコレを見て立っていた者はいない。

故に——

『貴様ごときがあのだ二人をやれる筈がない。いますぐ己の武勇伝から抹消しておけ』  
決着。

エレメント4全てが倒れた事で“煉獄碎破”アビスブレイクの発動を阻止、残る強敵はガジルとマス

タージョゼを残すのみとなった。

幽鬼フアントムロードの支配者を追い詰めているのだ。当然、ここまで奮闘した妖精フェアリーテイルの尻尾も無事では無い。

何かのきっかけで大きく天秤が傾く事だろう。そしてその天秤は早くもフアントムに傾いた。

ルーシイが囚われた。

ジョゼによる放送が流され、ルーシイの悲鳴が響き渡った事で皆に動揺が走り、そこに追い討ちとして幽兵ジエイトが強化され妖精の尻尾を潰すべく雪崩れ込み、仲間が、ギルドが瞬く間に傷ついていく。

一気に絶望的状况に立たされたのだった。

ガジル・レッドフォックスは幽鬼フアンソンロードの支配者最強の魔導士。

それはフアントムにおいてもそうだが、他ならぬ彼自身がそう認識していた。

あの夜、あの少女に敗けるまでは――。

「言えー！ リイリスとかつて言うクソガキはどこだッ!!」

ジョゼの目的とする目標人物ターゲットの一人、ルーシイ・ハートファイリアが護衛のリーダーを

連れて鍵を探しに出ていた所を、滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーの特質で優れた嗅覚を駆使して捉えた彼女の髪を掴み上げ、忿怒に濡れた表情で聞き出そうと躍起になっている。

「ぐっ、う！——ふふ、ここまでみつともないと哀れね。あたしが、あたし達が仲間を売るわけないでしょ？」

彼がルーシイを捕まえたのは、単にジョゼへの手土産ではなく彼女からリイリスの居場所を吐かせる為だ。しかし、いくら脅そうと痛めつけようと、リイリスがどこにいるか吐くことはない。

ここまでなにもかも上手くいかない現状に、ガジルは目の前のルーシイに激情をぶつけようと彼女に目掛けて拳を振るう。

「ガアジイルウウツ!!!」

「ナツ——!!」

しかし、下の階からこの階の床ごとぶち破ると言う荒技で登場したナツによつてガジルの拳は止まり、ルーシイを乱暴に突き飛ばし距離をとらされることとなる。

「チツ！ 邪魔をするなア!! 火竜サラマンダー!!!」

「これ以上仲間を傷つけさせるかアアつ!!!」

鉄と炎、竜の力を宿した二人の拳が激突し二度目の対決が始まった。

そんなナツとガジルの両雄がぶつかり合う度、下の階にまで魔力の波が届いていた。

それを心地良さそうに受け入れるのは、フアントムギルドマスターであるジョゼ・ポーラ。

「くくつ、よく暴れる竜達だ」

「マスター・ジョゼ……！」

彼は、自身のギルドに入り込んだ者達を己の手で葬るべくこの階へ足を運んだのだ。

そこに集まっていたのはアリアを倒したエルザ、その他にグレイ、エルフマン、ミラといったメンバーだった。

彼等はジョゼの発する邪悪で巨大な魔力に吞まれかけるも、強固な精神力で耐え凌ぎ戦う姿勢を見せる。

「こいつが、フアントムのマスターか……ッ！」

「ぬおおオオ!! 今こそ漢を見せる時!!」

正面からグレイとエルフマンの戦意を受けたにも関わらず、ジョゼは心底可笑しいと言うように、悪意に染まった笑みを携えた。

「さて、楽しませていただいたお礼をしませんとなア——たっぷりとね」

ジョゼは向かってくる二人に紫色の魔法弾を放つ。

それを受けたグレイとエルフマンは声も上げられず壁に叩きつけられ戦闘不能となった。しかしそれでも容赦しないジョゼは、広範囲にわたつての爆発魔法を発動、グ



レイ、エルフマン、ミラを巻き込み煙が立ち込み壁に大きな風穴が空け、外の景色を覗かせる。

さらに追い討ちにと三人の方に手を向けた所で、唯一逃れていたエルザが反撃に出る。

「黒羽くればの鎧」に換装、強化された運動能力を行使して遠距離から狙い撃たれぬように、なんとか接戦に持ち込んだものの、幾度も放つ剣閃は掠りもせず空を斬るのみ。ならばと、多くの魔力を乗せた瞬速の一閃を解き放つ。

だが——それでも届かない。

エルザはまるで遊ばれるように空振ったままの腕を掴まれ、床に叩きつけられた後に放り投げられた。

奴はこちらを躊躇いなく殺す気だ。

ジョゼから滲み出す殺意が体に絡みつき、不快感と悪寒を強く訴えている。

自分一人で聖十大魔道の一人である彼に、果たして勝利できるのか。

いや——勝たねばならない。

仲間の為、ギルドの為にッ。

「貴様、確かジュピターをまともにくらったハズ……なぜ立っていられる」

「仲間が……家族が私の心を強くする。愛する者たちの為ならこの体などいらぬわ!!」

「強くて気丈で美しい……なんて殺しがいのある娘むすめでしょう」

気高き妖精の女王の意を目にしたジョゼは、破壊衝動に浮かされた狂気の孕んだ両眼で玩具エルザを見据える。

そうでなくては壊し甲斐がない。

睨み合う二人から発せられる、相手を討ち取るという気迫だけが漂っていた。呼吸の音さえも聞こえてくるような静寂が保たれる中、遠くでナニかが崩れていく音が風穴を通してここまで届いた。

——まさかッ。

エルザの意識が一瞬、妖精フェアリーテイルの尻尾のギルドに向いてしまう。

須臾の間。

その油断をついてジョゼが動く。

地に手を添えてエルザを仕留めようと魔法を発動。

“デッドウェイブ”

床を抉り進む紫の波動が彼女を飲み込まんと牙を剥く。

迫り来る強力な魔法の前に、隙を見せ行動の遅れたエルザは逃げるのも防ぐのも間に合わない、諦めかけた時——感じた。

この懐かしく頼もしくも、包み込んでくれるような魔力は……。

次の瞬間、ジヨゼの放った魔法が白い光に浄化されたのだ。自身の魔法が打ち消された事に驚きを露わにしたジヨゼは、次に強大な魔力を感じた。

「いくつもの血が流れた……子供の血じや」

それは親の嘆き。

「できの悪い親のせいでは痛み、涙をながした……互いにな」

それは子供の痛み。

「もう十分じや——終わらせねばならん」

それが家族の為。

「マスター……！」

マスター・マカロフ復活。

大空のエリアにより魔力を失っていた筈の彼から発せられる、いつもの優しく包み込んでくれるような頼もしい魔力が、もう大丈夫と言うようにエルザ達に染み込んだ。

「全員この場を離れよ」

マカロフが意識を取り戻しかけていたグレイ達に一言だけ告げた。

目を覚ましたらここにいるはずのない、治療を受けていなければならぬマカロフの姿があつて、グレイとエルフマンは驚愕の声を上げる。

何よりも優先すべきはマスターの命令。それに従いエルザは二人に駆け寄りここか

ら離れるようと促す。

それでも残ろうと言い出すのをエルザは止め、ここには却つて邪魔になると現実を口にしたことで渋々離脱をすることとなった。この状況に驚き声も出せずにいたミラをエルフマンが抱き上げ四人はその場から離れていく。

それを気にもせずに、まるで蟻が巢に戻るのを滑稽に眺める破壊者の視線で悪意を紡ぐ。

「ふっふっふっ、無駄な足掻きを。どうせあとで殺してあげますよ」

「それは無理な話だな、ジヨゼよ」

吐き気を催す邪気に濡れた言葉を発したジヨゼに、威厳に溢れながらも嘔しわがれた声でそれは叶わないと告げる。

「ほう、私を倒そうという事ですか？ あなたが？ つまり、天変地異を望むというのですか」

狂気の混じった幽鬼の表情で、好戦的な台詞を続けるジヨゼを前に、マカロフは静かな怒りを瞳に浮かべ自身の目的を告げる。

「勘違いするなよ。ワシが来たのは最後に貴様と話をする為。貴様の最後の言葉を聞きにな」

「やれやれ、老人の戯言に付き合う趣味は無いのですが、まあいいでしょう。それで？」

話をしてみると挑発を込めた笑みでマカロフに続きを促す。

「貴様の目的はなんだ。ウチのギルドを潰すことか？」

「妖精の尻尾を潰す？ いえいえ、そんな事は二の次ですよ。私はねエ——」

あなたの絶望が見たかったのですよ。

「ギルドを壊し、ガキ共を潰され、最後には貴様らクズが積み上げてきたギルドそのものを解体する。これほど素晴らしい絶望はないでしょう!!」

ジヨゼの思惑はこうだ。

まずは妖精の尻尾のギルドの破壊行為。この挑発に乗り、攻めてくるもよし、来ないのであれば次の手を打つまで。当初の計画では、それに加えてジヨゼの知らないという体を装い、ガジルに妖精の尻尾の魔導士を襲わせ争いを誘発させるはずだった。

しかし、それはある少女によって阻止された事で未遂に終わり、ならばとその少女を使つて戦争の引き金を引かせたのだ。

フアントムの仕掛けた妖精の尻尾のギルドと、その魔導士への襲撃と比較して、被害を受けたとは言え妖精の尻尾マスター公認でのギルド丸ごとで戦争を仕掛けるのでは、被害の大きさや責任の重さが違ってくる。

きっかけは幽鬼の支配者、しかし戦争を始めたのは妖精の尻尾。この事実は揺るが

ず、さらにジョゼにはとある評議員と繋がりがあり、もし妖精の尻尾と戦争を起こす機会があつたら鼻負してくれるらしい。

これも日頃の行いだなと締めくくり、長々と語られた真相。

つまり妖精の尻尾がフアントムに攻めこんだ時点でジョゼの企みの一つが達成していたということ。

「くははははっ！ マカロフ!! 絶望はどうだ!!? ギルドを壊され、ガキ共を殺され全てを失うのは!!!」

長年の恨み、妬み、焦り、それらの多くの負の感情を吐き出すジョゼの様相は悪霊そのもの。

勝利を既に確信する彼の発言に、マカロフは深く小さなため息を吐く。

「上ではもう、決着が着いたか……ジョゼ、これが最後じゃ」

それは何を意味する発言だったのか。

上を仰ぎ見ていたマカロフは眼前の男に初めて最後の警告を発する。

「これ以上被害を出さぬ為、貴様に三つ数えるまでの猶予を与える」

——ひざまずけ。

「何を言うかと思えば……王国一のギルドに、フアントムロード幽鬼の支配者のマスターであるこの私に跪けだア?」

——一つ。

「屈するのは貴様らクズ共だツ!! 私強い。貴様よりも非情になれる分はるかに!!」

——二つ。

「その証明として私自ら、この手で! 貴様を殺してやるマアカアロオフウツツ!!」

——三つ。そこまで——

両手に闇色の魔力を収縮させ、人一人容易に消し去れる魔砲を放とうとジョゼがマカロフに手を向けた——刹那。

小柄な人影が飛び出てきたかと思えば、ジョゼの横つ面に強烈な一撃を見舞った。

目の前の敵しか見ていなかったジョゼは、本来なら余裕を持つて避けることのできたその攻撃を受けることとなり、人間砲弾の如く勢いよく吹き飛ばされる事となる。

それでも壁に衝突する前に踏みとどまり、すぐ体勢を整えたのは流石と言うべきか。

「いい加減、人の大事なものを傷つけるのは止めろよ」

この場に立っている者はマカロフと左頬を押さえるジョゼ、そしてもう一人。その人物を目にしたマカロフは、もう用は済んだとばかりにジョゼとは反対方向に歩みを進める。

「本当なら、ワシ自らが決着を着けたかったんじゃないがな。どうしてもやると言つて聞かんのだ」

マカロフの不可解な言動にジョゼは眉を潜めた。誰にたいして何を言っているのだと。

自分の吹き飛んできた方向に目を向けた時、その疑問が解消するのと同時に今度は驚きに支配される。

あり得ない——なぜここにアイツがいる。

あれほどのダメージを刻まれておきながら何故立っていられる？

痛々しく身体中に包帯が巻かれた少女だが、一步一步、確かな足取りでこちらに近づき、鋭く強い意志の灯った瞳を向けてきているではないか。

「だが……子供が自分で過去と向き合い、現在を乗り越えてエって言うんだ。ガキの成長を邪魔する親がどこにいる」

ジョゼ達から離れるマカロフは、たった今来たもう一人の少女のいる所まで足を進めた。

「ワシがレビイを守っている。安心してけりつけてこい」

——リイリス。

「サンキュ、おじい。ちょっと怖いけど、すぐ近くに守ってくれるって言う家族がいる。だから任せて」

老人と少女——リイリスの瞳が交差したのは一瞬。



マカロフから託された怒りを身に宿し、遠くで自分を見つめるレビイ、仲間の想いを糧にし前に進む——産まれて初めて天元に達している怒りをぶつける相手へと向かつて。

「貴様は何度、私の邪魔をすれば気が済むのだ……！」

「家族を傷つけられると言うなら、何度だって邪魔してやるよ、クサレオヤジ」

予想外の人物の登場に動揺したのも一瞬、その人物が誰かを認識したジョゼは、マカロフに向けた殺意すらマシと思える殺意を一人の少女に向ける。

「ふん、クズ共の群がる巢は潰れ、後は掃除をするだけ。今更、守るも何もないでしょう」  
「……二度目を許す事になった」

唐突なりイリスの呟きにジョゼが訝しむ。

しかし彼女の呟きは、聞くものが聞けばその意味を読み解くことができただろう。

あの時、ギルドに手を出す機会を二度は与えぬと宣言したリイリスは、ここに来るまで目にした、ジョゼの幽兵により瓦礫の山と化したギルド<sup>家</sup>。大切な仲間<sup>家族</sup>の傷つき嘆く姿。

その事を思い返し、思えば思うほど怒りが底から生まれてくる。熱せられた憤怒の炎が内より溢れ、リイリスの体から魔力となって現れる。

とうに限界値は踏み越えている。後は解放するだけ。

「オマエは一体どれだけワタシを怒らせれば気が済むんだ？」

リイリスを起点に周囲へ広がる、本当の熱を帯びた魔力波。

マカロフの張った魔力壁により守られているにも関わらず、レビイの肌をチリチリとした刺激が走り、勝手に冷や汗が吹き出てくる。

あまりの凄まじい怒気に、レビイが隣にいるマカロフに視線を移す。

「あやつは今、おそらく誰よりも強い。力を完全にコントロール出来ればこの勝負、リイリスが勝つだろう。じゃが、もしもの時はワシが勝負をつける」

心のどこかで不安が募るのを感じるレビイを安心させるように語るマカロフの額からも、うつすらも汗が滲んでいることからリイリスの魔力がどれだけのものかを物語っていた。

それを直接向けられるジョゼは彼女の規格外な力の奔流を受け、既知感を覚えていた。思い起こされるは忌まわしき記憶。

あれは、ルーシイに空の牢獄から逃げ出された直後の事。

「やってくれたなア……！　このクソガキア!!」

「が——ぐ、うあッ……っ！」

自身がトドメを刺す筈だった少女の抵抗に、ジョゼは頭の血管が切れる程の激情を抱いていた。

依頼目標であるルーシイを逃され、さらに急所を強打され立つのもやつとなジョゼは内股の状態でリイリスの首を片手で掴み上げ、怒りに溺れた眼差しを注ぐ。

「たしか、右手にギルドマークが押してあるんだったなア」

必死に首の拘束を緩めようと、両手でジョゼの腕を掴んでいたリイリスの右腕を乱暴に捻りあげ、掌を向けさせる。

彼が何をしようとしているのか、これから何を言われるのか、最悪な予感がリイリスの脳裏をよぎる。

「この紋章を右手ごとズタズタにして、二度とあのギルドの名を名乗れぬようにしてやる!!」

それは彼女にとって、何よりも許しがたく耐えられない行いだった。

ギルドマークを汚されるのは、自身の身を刻まれることよりも恐ろしく、考えられない事。

初めて自分の存在を受け入れ、証明してくれたギルドの、家族の絆。

ジョゼが懐から出したナイフをリイリスの手に添える。

「や——めろっ」

頼むからソレだけは傷付けないで。

「誰が止めるかクソガキ」

「——ッ!!!」

刃が肉に沈み、引かれていく。

掌の端から鋭い痛みが走り、ゆつくりと焦らすように切り傷を伸ばされる。それに比例してギルドマークに切先が近づいていく。

証を傷付けられてしまうという恐怖と怒りで、リイリスの瞳から涙が溢れてくる。

もう二度と、壊されないようにと誓ったのに、なんでまた証を失おうとしているのか。

これでは——

これではあの日と同じではないか。

「——アア」

それは二度目となる竜の産声。

締め上げられている声帯がジョゼの握力を跳ね返し音を鳴らす。

人間では到底不可能な体の動きを見せ、そして。

『オオオアアアアアアアアアアッ!!!』

怒りの叫びが放たれた。

それは正しく竜の咆哮であり、人が耐えられる圧ではなく、直接的なダメージが耳から始まり体全体を駆け巡った事で拘束を緩めてしまったジョゼの腕から抜け出そうともがくりイリスは、本能で彼の弱点——股間を蹴り上げた——。

「一度ならず二度までも……貴様だけは許せねエ」

奇しくも、双方の言い分が重なった瞬間だった。

理由は違えど、お互い大切なものを傷つけられた傷みに震え魔力を放出する。

両者共に怒りの蓄積は十分。

「だが……このオレが小娘如きを相手にするとは、考えもしなかった」

「何を言っているんだ？ オマエが相手にするのは小娘でも、魔導士でもない」

——一匹の怒れる竜だ。

フェアリーテイル ファンタムロード  
妖精の尻尾と幽鬼の支配者の戦争は最後の局面を迎えた。